
魔法少女リリカルなのはStrikers 風の吹く壺に

楊森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 風の吹く壺に

【Nコード】

N1956K

【作者名】

楊森

【あらすじ】

管理局に入局した高校生、彼はその瞳で何を見る

遭遇

「ハア、何で俺はこんな事に巻き込まれた」

バイトをクビになって、クサってたら空に幾何学的な模様が浮かんで、そしたら変な一つ目ポストに襲われたんだっけ。

「ハア！何だんだよ！！」

「オイ、マスター！」

「何だ！？ 幻聴か！？」

首を左右に振り、辺りを見回したが誰もいない。

「幻聴じゃないぞ、胸元をってみろ、それが本体だ！」

「んっ！もしかして、このペンダントか？」

龍騎の胸元には、昔師事した爺さんから貰った青い水晶玉のペンダントがあった。

「ああ、そうだ！」

「何でペンダントが喋るんだよ！？」

「そんな事は、後で説明してやるから、名前を付けろ！ 急がないと、ガジェットが来るぞ！」

「ガジェットって、何だ？」

「マスター風に言うとだな、一つ目ポストだな」

「あの一つ目ポスト、ガジェットって言うんだ！」

「あっ！ 伏せる！」

「えっ！ うわっ！」

一つ目ポスト改めてガジェットが光線を放ってくる。

「見付かったかよ、どうすればいい？」

「まだ、死にたくないなら私に名前を付ける！」

龍騎「名前だ！？ 何で名前なんだよ！？」

「マスターが名前を付けなければリミッターが掛かった状態で戦闘等は一切出来ない」

「分かった！ え〜と、お前の名前は、う〜んとよし、これだ！
お前の名前は、>フツヌシくだ！」

「>名前認識完了< >武装と防護服を決定して下さい<」

「武装だ〜！？ え〜と、どうするだよ！？」

「頭の中でイメージしろ！」

「（武器は刀だな）、バリアジャケットって何だよ!？」

「魔導士が着る戦闘服みたいなモノだ!」

「じゃあ、これだ!」

「Stand by ready」

「Setup」

銀色の球体が龍騎を包み晴れる、そこには、柄尻にペンダントがはめ込まれた刀を右手に持ち、長袖に青い半袖のジャケット、長ズボンをはき、手には指切りグローブと手甲を着け、足には脚甲を着けた龍騎の姿があった。

「うわっ！　すげえ！　イメージ通りだな!」

「感動している場合か!ガジェットが来るぞ!」

「おう、来るなら来やがれ!の前に、フツヌシお前何ができる?」

「主にマスターのサポートだな!他には、マスターがイメージした魔法の構築、発生や自動防御などだ!」

「自動防御?　何だそれは?」

「まあ、それは、>Protection<　こついう事だ」

「サンキュー、助かったぜ!　フツヌシ、俺がイメージした魔法を構築するんだよな」

「はい、そうですか？」

「じゃあ、こういうのは？」

「>イメージ受信< 可能ですが、マスターがいけますか？」

「物は試しだ！ 行くぜ！」

「Yes my mister」

「行くぜ、このくそガジェットが」

ガジェットが攻撃してくるが、躲せるのは躲し、躲せないのは受け
ガジェットに近づていく。

「くらいな、シロガネイッセン>銀一閃< オラッ！」

ドッカーン×3

「案外、呆気ないな」

「違うぞ、マスターが凄過ぎるのだ！」

「はあ？ 何でだよ？」

「さっきのは私の表面に魔力付与させて斬るだけの筈が、マスター
の魔力コントロールが良過ぎる性で、付与された魔力が私の表面に
もう一枚の刃になって切れ味が上がり過ぎてしまっている！」

「マジかよ!?!」

「マジだ!、あとガジェットまだ残ってるぜ」

「フツヌシ、それは早く言え!」

「来たぞ!」

「はん、来やがれ!」

「あれから、何であんなに来やがるんだ?」

「マスターが一撃でガジェットを壊しまくったからじゃないか」

「多分、それだろう、もう駄目だ寝る」

「ちょっと待て、マスター!」

「グ~~~~?~?~?」

「寝るの早っ! > M o d e s t a n d b y <」

「ガジェットの反応があつたのでこの辺りだよな? シグナム」

「ああ、その筈だが、ヴィータ、こっちに来てみる!」

「どうした、シグナム、って、これは！」

「ああ、ガジェットが全て破壊されている、いったい、誰が？」

「おい、シグナム、人が居たぜ！」

「本当か、ヴィータ？」

「ああ、こいつだ、どうする？」

「二人共、何かあったかい？」

「ガジェットは全て破壊され、民間人らしき人が倒れている、どうする、クロノ・ハラウン提督？」

「民間人は保護、調査には調査隊を送る、二人共、帰還してくれ」

「了解した、民間人は保護だそうだ、帰還するぞヴィータ！」

「保護って、何処に保護するんだよ？」

「なっ！ こいついつの間に起きやがった！？」

「保護するなら、保護してくれ、さっきまでそこら辺に転がってるガジェットとか言うのをぶっ壊して疲れてるんだ」

「貴様が一带どうやって？」

「こいつを使ってな、フツヌシ、武器だけだぞ」

フツヌシ「Yes my mister」

光った後には、柄尻にペンダントがはめ込まれた日本刀>フツヌシ
くがあった。

「こいつの名前は>フツヌシ<、さっきまでこいつを使って、あの
ガジェットって言う奴らを壊してた、あいつら、最後は団体で来る
からちよつとてこづつたけどな」

、ヴィータ、

、ああ、「おい、お前、名前は何て言うんだ？」

龍騎、草薙龍騎だけど、それがどうした？」

「草薙、すまんがしばらくは此处には帰れんぞ」

「はあ？>ドカツ！<うつ！」

「ガジェットを破壊した奴を発見、気絶させて連れ帰る」

「了解した」

説明

「それで、その子は今どうしているの？」

「シグナムが無理矢理気絶させて連れて来たから、今は医務室で寝ていますよ、リンディ・ハラオウン統括官

「会ってみたいわね、その子に」

「はあ、母さん、またそういう事は後回しにして下さい、問題は彼が所持していたデバイスですよ」

イ「どうして管理外世界の住人である彼が何故デバイスを所持していたのかでしょう？ 本人に聞くしかないわね」

「そうですね」

医務室…

「うーん、此処は何処だ？」

「時空管理局の次元航行艦の中にある医務室だ」

「何でこんな所にいるんだ？」

「ピンクのポニーテールの女に首筋を殴られて気絶させられて連れて来られた」

「あつ、あの女か！ 次に出会った時に一発殴ってやる！」

「それは止めといた方がいいですよ」

「あゝのゝ貴女は誰ですか？」

「あつ、私はシャマル、医務官をしているわ、ちょっと待ててね」

通信モニターを出して

「クロノ君、彼が気が付いたわよ」

「了解した、彼の話を知りたいから、応接室まで連れてきてくれ」

「了解したわ、そう言う事だから、私について来てね」

「何か知らんが、とにかくついて行くか」

「そうですね」

応接室…

クロノ「やあ、私がこの「次元航行艦の艦長」って何で知ってるんだ」

「こいつに教えて貰った」

フツヌシ「お安い御用です」

「気を取り直して、私がこの次元航行艦>クラウディア<の艦長を

しているクロノ・ハラOWN提督だ、単刀直入に聞きたい、君はいったい何処でそのデバイス>フツヌシ<を手にいれたんだい？」

「確か、子供の頃に剣術を師事した爺さんから卒業つうか、もうお前に教える事はないって言って免許皆伝祝いにくれたんだたかな、フツヌシ」

「マスターの話通りです、私は免許皆伝祝いにグランドマスターからマスターに贈られたデバイスです」

「って、訳だ、てか、デバイスて何？」

ノ「所持していた理由は分かった

デバイスとは我々魔導士が使う杖だと思ってくれ、それでその爺さんからデバイスとしての説明は無かったのかい？」

「無かったぜ、今日初めて知ったからな」

「だそうですよ、ハラOWN統括官」

「あら、気付いてた!？」

「当たり前です!」

「なあ、クロノ提督、彼女はあなたの姉君か？」

「レティ、この子良い子よ」

「どうしたの、リンディ？」

「若っ！」

「確かに良い子ね」

「草薙、悪いが彼女は姉じゃなく母とその友人だ」

「はあ？　ちよつと待て！　どう見たって彼女たち若過ぎだろうが！
外見と年齢の差が激しい過ぎる」

「あら、何歳ぐらいに見えるのかしら？」

「大体、二十歳前半ぐらいです」

「きゃあ、嬉しい！」

「話を戻しますよ！」

「もう、クロノのいけず　まあ、いいわ！」

（良いのかよ！）

リュウキは心の中でコントに突っ込んでいた。

「草薙君、時空管理局に入局しない？」

「いいですよ」

『えっ！　今何て言ったの？』

「だから、いいですよ　両親はとつくの昔に他界してますし、伯父夫婦の所は少し肩身が狭いですけと迷惑かけましたから、挨拶して

からですかね」

「了解した!」

「じゃあ、私が挨拶に出向くわ
今日は早あがりですしね」

「じゃあ、お願いします」

龍騎の自宅近く…

路地裏に魔方阵が現れ、リュウキとリンディが現れる。

「何これも魔法?」

「うーん、基本は同じだと思っけど少し違つかしら?」

「似たような物です」

「まあ、いいか、家はこっちですよ」

「分かったわ!」

自宅前…

「はあ、よし! 入るか!」

「(・・・?)」

龍騎「リンディさん、扉の前から退いて下さい」

「えっ、ええ！」

「ただいま！」

ドタン、ドタドタドタ

「遅いわよ！ 今何時だと思って……あら！ こちらの方は？」

、どなたかしら？、 伯母です、

「初めまして、リンディ・ハラウンと言います、ある会社の人事を担当しております、今日はこちらの草薙龍騎君の事でお伺いしました」

「あつ、すみません、龍騎の伯母の仲田圭子です、どうぞ、おあがりになって下さいな」

「失礼します」

「圭子、どうした？ って、ハラウンさん！？」

「仲田さん！-！」

「えっ、二人共知り合いなの？」

「ほら、商店街に翠屋って喫茶店あるだろ、あそこの常連仲間だ」

リュウキは目を細めて告げる。

「始伯父さん、リンディさんがいくら綺麗だからって浮気は駄目ですよ」

「ちょっと待て！ 私は圭子一筋だから！」

「本心はどうだか」

「あゝの、玄関先だとか近所に迷惑じゃ？」

「そうね、応接間に移動しましょ」

『はい！』

何とかリンディさんの口八丁で、管理局を会社と誤認させて、許可を貰いました。

学校の友達には盛大に祝うと言われたが、準備が有ると言う理由でさっさと辞退してリンディさん宅にお邪魔して、ミッドチルダに直行！

鍛練

ミッドチルダに来てからは一週間程は訓練校への転入手続きや魔法の適正検査で潰れた。

「やってきましたミッドチルダ、ってか、マジですげえな！
（だって空間モニターに完全な電気自動車、扉が自動に開くって自動ドアじゃん！）」

リュウキは一人でツツコミして一人で納得する。

「ニヤハハハハ、そんなに凄いな？」

今喋ったのが、不屈のエースオブエースこと高町なのは一等空尉殿。これから、3ヶ月間の訓練の面倒を見てくれる人。
でも何でこんな有名人が俺の指導員？ マジでありえねえ！

「あの龍騎君？」

「あの高町一尉、何故貴女が俺の教導担当なのでしょう？」

「呼び方は、なのはで良いよ

何でかと言うと、龍騎君の配属先は半年後に新しく設立される部隊に決まってるの、名前は長いから覚えてね『遺失物管理部機動六課』、ここに配属が決まったんだけど、上から『自分の所の新人なら、自分達で鍛えろ』って圧力きつちゃてね」

「ハハハハ、事情は分かりましたが、陸士第4訓練校？ 何で此処に来たんですか？」

「うちの訓練施設がまだ完成してないから、此処の施設を借りるの、
って、今ミッド語を読んだよね？」

「昔、師事した爺さんが体ばかり動かしとると、筋肉バカになるからって、勉強代わりに覚えるって言われて覚えしました」

「分かったわ、じゃあ、部屋まで案内するから、訓練服に着替えた
ら第二訓練室に来てね」

「はい！」

ああ、やっぱりこの人は有名人だ！ さっきからすれ違う訓練生の奴ら全員振り返りやがる。

「仕方ありませんよ！ マスター」

ああ、だがこの針のむしろは何なんだ！ 俺を見るな！ 俺を！ 俺は珍獣かよ！

「有名人が案内してるせいでしょうね」

「おい、高町教導官だぜ」

「不屈のエースオブエースの！」

「後ろの奴は誰だ？」

「多分、八神二等陸佐から要請があつた奴じゃないか？」

「じゃあ、エース候補かよ！」

「いいな、才能のある奴わよ」

「この部屋が龍騎君の部屋だよ、荷物を置いて訓練服に着替えたら、

さっき言ったとおり第二訓練室に来てね」

「はい！」

数分後：

龍「着替え終わったし、さっさと第二訓練室に行くか」

F「マスター！置いて行かないでください！」

龍「悪い、忘れてた！」

第二訓練室

「すみません！、遅れました！」

「大丈夫だよ、私も今来たところだから、じゃあ、さっそく始めようか」

「はい！」

「じゃあ、室内を軽く百周して来ようか」

「はい！（百周の時点で軽くないでしょ！ 逆らった後が怖いからやめとこー！）」

数分後：

「これで百周目と、ゴール！なのはさん、次は何ですか」

「じゃあ、デバイスを起動させて！」

「行くぞ、>フツヌシ<」

「Stand by Ready」

『Setup』

「起動させましたよ」

「ねえ、そのデバイス>フツヌシ<だっけ、カートリッジシステム付いてる？」

「私が作られた当時は、まだ使用者に負担がかからない完成したシステムではなかったため、私には搭載されていません」

後でならったが、ベルカ式の象徴的なシステム>カートリッジシステム<！

魔力のこもったカートリッジをデバイスにロードさせて、瞬間的にだが能力を増大させる。

その分扱いにくいらしい…。

「じゃあ、後付けか別のデバイスに搭載しなきゃ駄目か、後でシャーリーにお願いしなきゃ駄目か、先ずは、龍騎君、フツヌシに入ってる魔法に何かがある？」

なのはさんは唇に親指の爪を噛む様に当て、少しブツブツ言いながら考え込む。

「刀身に魔力を付与させて切るやつ以外は何かあったけ？」

「それだけだ」

「だそうです」

「じゃあ、ちょっと見せてね」

「的か何か有りませんか？」

「ちょっと待てね、今出すから」

「何すか、あれは？」

いきなり現れた透明な人形を指差す。

「的だよ」

「了解、行くぞフツヌシ、>鉄一閃クロガネイツセン<」

唐竹割にフツヌシを振り切る。

「綺麗に真つ二つだね」

「じゃあ、宿題に近距離と遠距離の魔法を二種類作ってきてね
あ、フツヌシはもう戻していいよ」

「はい！」

なのは「じゃあ、ある程度の使い方はわかるね!」

龍「はい!」

なのは「じゃあ、お勉強しようか」

「へっ!?!」

「龍騎君、> 念話くって知ってる?」

、これですか?、

、うん、そうだよ、あっ!、

、どうかしましたか?、

「もう普通に喋っていいよ、もうお昼の時間だしね、食堂に行こうか」

「賛成です、あつてもな」

「どうしたの?」

「金が無い?」

「えっ、六課から支給されてないの?」

「全然、貰ってませんよ」

「ちょっと待ってね、検査のとかのこたごたで支給されていないみたいね、じゃあ、私が奢るわ!」

「ありがとうございます!」

午後：訓練室

「今日は初日だから、ここまでにしようか」

なのはさんは持っていた分厚い教本を閉じる。

「了解、マンツーマンの授業がこれほど辛いとは思わなかった」

「じゃあ、初日の復習ね、私の使う砲撃魔法とその種類は?」

「砲撃魔法は魔力をダイレクトに放出するシンプルな魔法で当たれば一撃必殺の威力を持つけど、溜めに時間がかかるのが欠点でしたね、種類は、発射前の魔力を更に凝縮させて威力を向上させる「収束型」に、大量の魔力を一気にぶち込む「直射型」の二種類でしたけ?」

「正解!　じゃあ、次は防御魔法の種類ね」

「え」と、確か範囲が狭く発動も魔導士自身が発動しなくてはいけないけど、防御力が最堅の>シールドタイプ<、バリアジャケツトみたいに常時展開されるけど、発動している限り魔力を消費する>フィールドタイプ<、最後が範囲が広くて大人数をカバーできるけど防御力が低い>バリアタイプ<でデバイスの自動防御に使われる

の三種類でしたね」

「正解、覚えたことは忘れないみたいだね、時間が掛かっても、確実に成長できるね！、あつ、それと宿題は忘れない様にね自主トレ用に訓練室借りといたから、自由に使っていいよ！」

「はい、お疲れ様でした！」

・「オリジナルの魔法か？」

「どうしますか、マスター？」

「訓練室で考えよう、思いついたら、すぐに使用できるしな」

「そうですね」

訓練室…

「近距離はまあ、鉄一閃くをベースにするとして、遠距離は射撃魔法にするか、確か、フツヌシお前には俺がイメージした魔法を作れるんだっただよな？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、こんな魔法はどうだ？」

「ちょっと待って下さい……………出来ましたよ、名前は どうします

か？」

「名前か？（中距離や遠距離はこの魔法をベースにするからな）、
>マイティショット<

「基礎射撃か、他の魔法の元にするからか？」

「ああ、この魔法を応用して新しい魔法を作りたいからな！」

「例えば？」

「>マイティショット<は直射型だから、改良して操作型とかにしたいんだよ」

「マスターらしい考え方だ」

「そこはほっとけ、後は名前を言えば発動するんだっただな？」

「そうですよ」

「じゃあ、的を出してと、>マイティショット<」

「案外、牽制とかに使えそうだな」

「そうですね」

「次は近距離魔法だな」

さてとどうするかな？ >鉄一闪<は魔力付与斬撃だからな当たらないきや意味が無いけどさっきみたいに敵は止まってない、なら当た

り安くするには、そうだ！

フツヌシ、高速移動の魔法はどうだ？」

「マスターの主攻撃は、私による斬撃だからな、発想は悪くない」

「じゃあ、作ってくれ！」

「分かった……出来たぞ、名前はどする」

「そうだな、（速いはファスト、移動はムーブだったな）、>ファストムーブ<はどうだろう、それと短距離の高速移動魔法も作れるか？」

「出来ませんが、どうして？」

「近距離からいきなり接近されてみる、敵はそう反応できないぜ」

「分かりました、名前はどうしますか」

「>クイックアクション<だ」

「登録完了だ」

「じゃあ、次は……フツヌシお前さ、俺が最初にお前を使ったときに変な事言わなかったか？」

「何だ、マスター？」

「>魔法を使うのは初めてくって聞いて、あの時お前、驚いてたよな？」

「ああ、あの時か、余りにもマスターの魔力コントロールが良かったからな」

「なあ魔力スフィアって球体をイメージすれば良いんだよな」

F「その通りだが、マスター？」

「じゃあ、的を出してと」

>ショットガン<」

パン！

「有効距離は約50cm位か奇襲技としてはまあまあ威力だな」

「マスター、私はお払い箱か？」

「何でそんな発想になる！？」

「だって今、一人で魔法を使いましたよね」

「あんなのは魔法と呼ばないよ、第一俺は剣士だぞ！、魔導士じゃない」

「そうでした、ところでさっきのは何だ？」

「魔力スフィアを形成して、瞬間放出したんだ、これでいきなり敵に接近された時に対象できるぜ」

「マスター、普通そんな事は考えんぞ」

「いいじゃねか、隠し玉ってことさ」

「了解した」

「>ファストムーブ<と>クイックアクション<を練習して寝るか、
なのはさんには>ショットガン<をバラすなよ」

「私を通して発動されていないから登録されていないぞ」

「分かったぜ！」

翌日：

「以上が俺とフツヌシの作った魔法です」

昨日、訓練室で作った魔法をなのはさんに最初にある程度説明してから実演した。

「うん、なかなか良いね、>マイティショット<だけ、そのバリエーションがこれからの課題かな？」

「ありがとうございます！」

「じゃあ、今日も張り切っていくよ、昨日と同じく百周行ってみようか」

「はい！」

3ヶ月後…訓練室

今日が短期訓練コースの最終日。魔法と剣術と奥の手を組み合わせた戦術も板に付いてきたし、強くなった実感がある。

「今日は最終日ってことで総合戦闘訓練の日だったよな？」

「はい、そうですよ！」

「頑張って合格しような！」

「はい、マスター！」

ドーン！、いきなり扉の前の床が轟音と共に跳ね上がり、その後は長い金髪を黒いリボンでツインテールにまとめているのが印象的な赤い瞳の少女が立っていた。
漆黒のバリアジャケットに身を包んだ少女はなのはさんと同じくらいの年だと感じる。

「誰だ！？」

「……………」

龍「だんまりか…」

「私と戦え！」

「プロテクション」

龍「速っ！」

視認可能なギリギリの速度で接近され、振り下ろされた戦斧型のデバイスの一撃は、フツヌシの防御魔法で防がれた。

「ちっ、くらいな」

フツヌシを数度振るが、戦斧で全て防がれる。

「エースオブエースを待っても来ないわよ」

「てめえ、なのはさんに何をした!？」

「答える義理はない！」

「じゃあ、力ずくでだ、フツヌシ!、Dだ！」

「>ドラゴンショット<」

「くらいな！」

D:ドラゴンショット

マイティショットのバリエーション

教導ビデオに映った魔法スティングァスナイプを見本にしてマイティショットを改良した誘導操作射撃魔法。

「無駄だよ! ターン！」

「弾くじゃなく破壊か、なら、これだ！」

俺は、胸の前で梵字を描き、木球を生成する。

相手には指で何かして木の玉が出てきたようにしか見えないが。なのはさんにも教えてない俺の奥の手だ！。

「全てを飲み込む大樹を芽生えさせろ、《大樹枯渴》」

「なっ！」

金髪ツインテールの雷の槍は、俺が放った木球から発生した大樹に巻き付かれ締め壊される。

「よっしゃ！」

あれ、作るのに苦労したからな、上手くいった良かつたぜ。

「フツヌシ！」

「>ファストムーブ<」

「はっ！」

「バルディッシュ！」

「サイズフォーム」

戦斧型のデバイスを変形させ、死神のような鎌になりフツヌシを受

け止めた。

「くっ！」

「この程度？」

「まさか」

俺は、フツヌシで死神の鎌を払い、バックステップで遠ざかりながら梵字を描き火球を生成する。

「>比和属性、豪炎の旋風<」

火球を投てきし、発生した火の竜巻が金髪ツインテールを拘束した。

「（よし、こいつで決める！）」

俺は、鞘を腰から抜きフツヌシと交差させる。

「フツヌシ、あれいくぞ！」

「了解、マスター！」

「>クロスバスター<」！」

俺が砲撃を放つと同時に、火の竜巻が中からの攻撃で散らされた。
「バルディッシュ！」

「プラズマスマッシャー」

金髪ツインテールの放った金色の砲撃は俺が放ったクロスバスターと同威力なのか、せめぎあっている。

龍「（フツヌシ、一発だけならDを打てるか？）」

、打てますが、どうしてですか？、

、俺がバスターを制御するから、その間に死角からDをぶち当てろ、

、分かりました、

、いくぞ、フツヌシ、

、了解、マスター、

龍「ウオオオオ！」

F「>ドラゴンショット<」

放たれたドラゴンショットは、大きく迂回し死角から金髪ツインテールを襲う。

「キャッ！」

「よし、成功、フツヌシ！」

「>クイックアクション<」

クイックアクションを利用して、俺は金髪ツインテールに近づき、デバイスを訓練室の隅に飛ばし首にフツヌシを突き付ける。

「チェックメイトだ！」

「そこまでだよ、龍騎君」

「へっ！　なのはさん！」

「フェイトちゃん、大丈夫？」

「大丈夫だよ、拘束までされるとは思わなかったけどね」

「そう言えば、龍騎君、あの大樹と火の竜巻は何したの？」

「あれは昔、剣術と一緒に習ったんですけど、俺に合ってたらしく、教えてくれた爺さんは火球出して飛ばすぐらいしかできなかったんですけどね、なのはさん、黙っててすみません、ところで、二人は知り合いですか？」

「うん、幼なじみだよ、黙ってたことは初任給が減る減俸処分だからね」

「ちょっと、なのは！」

「だって、リンディさんの決定だもん」

「はい、分かりました」

「じゃあ、本日の結果発表ね、最後のは、博打だから余り賛成できないけど、それを除けばまとまとたよ、フェイトちゃんはどうかだった？」

フェイト「やはり、私も最後のは賛成できないね、やっぱり戦闘内容としてはまとまっていたよ」

「割り込み失礼！」

「ハラオウン統括官に、レティ提督！」

「良いわよ、楽にしてて」

「良かった、久しぶり母さん」

「母さん？」

「龍騎君は知らないんだっけ、フェイトちゃんのフルネームは、フェイト・T・ハラオウン
リンディさんとは親子だよ」

「じゃあ、クロノさんとは兄妹か
って、二人はいきなり割り込みは何ですか？」

「人事だから私から結果発表ね！」

> 草薙龍騎殿、本日をして時空管理局地上本部一等陸士に任ずる
魔導士ランクは陸戦A+とする<」

「ありがとうございます、あのA+って高過ぎませんか？」

> 本当は、B+だったんだけど、レアスキルを二つも持つてると妥当なのよね<

「レアスキルって、希少技能の事ですよ、俺、二つも持ってた？」

「一つはさっき見せた＞符＜で、もう一つはレアスキル認定されない＞魔力高速運用・瞬間詠唱処理能力＜なの、だから、二つ」

「分かりました」

試験

あのテストから3ヶ月経ちその間に、俺はいろんな資格試験を受けて全て合格した。

面倒な事にも巻き込まれたりしたから、管理局員で俺の事を知ってる奴が増えちゃった。

その間、何処に住んでたって、借りてるアパートにいた。まだ、六課の隊舎は完成していないからな！

「いつや、あんなに勉強したのは、久し振りだったな」

「後半ぐらい寝不足気味でしたね！」

「バイクに乗りたかったしな」

俺の居た高校は、校則で禁止してたからな。

「しかし、何故にデバイスマスターの資格を取得したんですか？」

「フツヌシ、お前をメンテナンス出来るから」

「ありがとうございます！」

「それにしても、暇だな」

「呼び出しは有りませんし、受けられる資格試験は全部受けました

からね」

因みに鍛練はサボってないからなちゃんと続けてるぞ、その証拠に新しい魔法も作ったしな。

「どうしました？」

「変な声が聞こえた、多分、幻聴だろ」

「そうだと、思いたいですね、マスター、なのはさんからの通信を受信しました、映像を出します」

「分かった、出してくれ！」

「了解した」

「なのはさん、いきなりどうしたんですか？」

「実は10時ぐらいに、フォワード候補のBランク昇格試験が始まるの、未来の仲間候補だから、龍騎君には試験を見学してほしいの」

「はい、分かりました、場所は何处ですか？」

「臨海第八空港近隣の廃棄都市部だよ」

「了解しました、直ぐに行きます」

なのは「待ってるよ！」

龍「フツヌシ、急ぐぞ！」

「了解！」

俺は、急いで陸士服に着替えて一回に降り、駐車場に止まっている愛車に向かった。

俺の愛車は、陸士部隊に近々配備予定の管理局員専用バイク >イクサリオン<の試作機>イクシオン<。
(外観は平成仮面ライダー第一作仮面ライダークウガのビートチェイサー)

実はこのバイク、置き場に困ってから、テスト人員ってことで、技術部の人から貰ったんだよね。

「行くぜ、イクシオン！」

「OK、Master、目的地は何処ですか？」

実はこれ、貰った後にデバイス機能を付けちゃった、良かったかな？まあ、今さらだけどな。

「臨海第八空港近隣の廃棄都市部だ！」

「OK！ Let's Go！」

三十分後：臨海第八空港近隣の廃棄都市部

「着いたな！、なのはさんは、何処ですか？、

、あつ、龍騎君、えっと今、何処にいる？、

、廃棄都市区画の入り口ら辺ですね、

、じゃあ、私が今いる場所のマップに送るから、そこに来てね、

、分かりました！、

ピッ！

「着たな、場所は此処か！
行くぞ、イクサリオン！」

「OK、Master！」

数分後：

「此処だな」

「マップの場所とも一致します」

「あつ、龍騎君、此処だよ！」

「はい」

俺は階段を上がり、なのはさんが顔を出した階に向かった。
そこには、空間モニタを見るなのはさんの姿があった。

モニターには、オレンジ色の髪の子と青がかかった黒髪の女の子が映っていた。

「この子達がフォワード候補ですか？」

「そうだよ、オレンジ色の髪の子がティアナ・ランスター二等陸士で黒髪の子がスバル・ナカジマ二等陸士。
今まで災害担当の部隊に居たけど、二人共素質があるから六課に引き抜くの」

「二人共、試験頑張れよ」

なのはさんの説明を聞きながら、モニタに映る二人を見る。

モニタの映っている二人は、スバルはシャドーファイトをして調子確かめてる、ティアナは銃型のデバイス（銃型か、珍しいな）を確かめてる。

「なのはさん、もしかしてこの二人のデバイスって、自作ですか？」

「うん、そうだよ、龍騎君は、もう飛行魔法は使えるの？」

「フツヌシに補助にもらって、簡易なら使えます、でも、姿勢の制御が難しくって」

「練習あるのみだね！」

スバル「ふっふっ！ ふっ！」

左右のコンビネーションからハイキック！

うん、いい調子！。

「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのおんぼろローラーが逝っちゃうわよ！」

「ティアナ、嫌な事言わないでよ、ちゃんと油も差してきた！」

文句を聞き流しながら、手袋の手首部分の押し、時間表示を確認する。

ティアナ「そろそろね」

開始時間になり、陸士服を着た銀髪の女の子が映った空間モニタが二人の前に表示される。

>おはようございます、さて、魔導士試験の受験者2名揃っていますか？<

「はい！」

「確認しますね、時空管理局陸士386部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士とティアナ・ランスター二等陸士」

『はい！』

>保有している魔導士ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは陸

戦Bランクへの昇格試験で間違いないですね？<

「はい！」

「間違いありません！」

>はい、本日の試験官を務めますのは、私、リインフォース？空曹長です、よろしくですよ！<

二人とも、敬礼する。

『よろしくお願いします』

>二人は、此処からスタートし各所に設置されたポイントターゲットを破壊、勿論破壊しちや駄目なダミーターゲットもありますからね！

妨害攻撃に気を付けて、全てのターゲットを破壊、制限時間内にゴールを目指して下さいです、何か質問は？<

スバル「えっ…と？」

スバルはティアナに視線を移し、視線で問い掛ける。
ティアナはスバルの視線に答える。

「有りません！」

ティアナの返事を聞いて、

「有りません！」

>では、スタートまで後少し、ゴール地点で会いましょう！、ですよ！」

モニタが閉じ、カウントシグナルが表示され、カウントを始める。
、3、2、

「レディ」

カウントが0になり、モニタに>START<と表示される。

『ゴー！』

.

おっ、始まったな！

まずは、スタートから進んだ先にあるビルか、二手に別れたか。

ついに試験が始まったぞお！

まずはティアと近くのビルだ！

すかさず、ティアが「アンカーガン」の照準を合わせる。

ビルの壁にアンカーを打ち込んで、魔法を使って固定させる。

「スバル！」

「うん！」

ティアと腕を組んで、アンカーを引く。

「中のターゲットはあたしが潰してくる！」

「手早くね」

「オツケエエエ」

ティアから離れ、そのままの勢いでビル窓をぶち破って入り込む。さっそく反応して、付近の敵に対して自動攻撃するオートスフィアが一斉にこっちを向く。

自作ローラーを加速させて、スフィアの射撃をかわしていく。ある程度まで近づき、一気に加速して、右拳を叩き込む！

一つ！

すぐに近くのスフィアにも回し蹴りを放つ。

二つ！

残りの三つ目はまだ遠い！
だったら………！

「ロードカートリッジ！」

右手の>リボルバーナックル<に付けられた弾倉が回転して、カートリッジを打ち込む！

圧縮した魔力が唸りをあげてリボルバーナックルの周囲で回転する。

よし……チャージ完了！

「リボルバアアア……シュートッ！」

水色の魔力光の弾丸が右腕から発射される。
弾丸は一直線にスフィアに迫り、粉碎する。

これで三つ！

今頃、ティアは外からターゲットを狙い打ちしてるはず……。
早く合流しなきゃ！

移動しながら邪魔なスフィアを破壊し、出口に向かう。
ちょうどティアも破壊し終わって、合流してくる。

「ティア、いいタイム！」

「当然！」

それから、あたしたちは順調にターゲットを破壊していく。
崩れた道路内のターゲットとスフィアを破壊したところで、揃って
カートリッジを換装する。

「よしっ、全部クリア！」

「この先は？」

「このまま上、上がったら集中砲火がくるわ

> オプティック・ハイド<使って、クロスシフトでスフィアを瞬殺

……やるわよ！」

「了解っ！」

真上の穴にティアがアンカーガンをセットして、すかさず巻き上げる。

密集しているスフィアは、アンカーガンに集中している。アンカーガンが頂上に到達し、スフィアの攻撃を受ける。

その前に別の場所から登って、背後からスフィアに近づく。

「五……四……」

ティアのカウントダウンが始まる。

その間にあたしはらりボルバーシュートの射程内まで一気に間合いを詰める。

ティアのかけたオプティック・ハイドが速度に耐え切れず、剥がれていく。

それにあわせて、スフィアもこっちに気付く。

十分に近付いてるから、あたしは簡単にスフィアを幾つか破壊する。

「三……二……一……！」

スフィアの射撃攻撃をかわしながらカートリッジをロードして、射程内に入った！

ティアも姿を現して、多くの目標を同時に攻撃する。マルチショットくの準備を完了する。

「ゼロ！ クロスファイヤアアア……」

「リ・ボ・ル・バアアアアア……」

二人の魔法が同時に発動する。

『シューーーーーーッ!!』

ほとんどのスフィアが、その一撃で全て爆散する！

無防備になったターゲットを一つずつ破壊していく。

「イエーイー！ ナイスだよティア、一発で決まったね！」

「ま、あんだけ時間があればね」

囃に使ったアンカーガンの調子を見ながら、ティアがぼやく。

素直に喜ばいいのになあ…。

「普段はマルチショットの命中率、あんまり高くないのに……ティアはやっぱり、本番に強いなあ」

「うっさいわよ、さっさと片付けて次に……っ!？」

「ん？」

ティアが血相を変えて走ってくる。
どうしたんだろう？

「スバル、防御！」

あたしを突き飛ばして、ティアが走りだす。
視線の先には……オートスフィア！

討ち残してたスフィアが光弾を乱射する。

何とか回避しながら、物陰に隠れてやり過ごす。

「あぁっ!？」

悲鳴を上げて、ティアが転ぶ。

瓦礫に足を引っ掛けた!？」

転がりながら、スフィアに光弾を何発はすしながらも打ち抜く。

「ティアッ!」

しゃがみこんでいるティアに駆け寄る。
もしかして……。

「騒がないで、何でもないから……」

「嘘だっ! 『グキッ』 っていったよ! 捻挫したでしょ!？」

「だから、何でもないって……ッ!」

無理に立ち上がろうとするけど、すぐに右足首を押さえてうずくまる。

「くっ……たぁぁ……!？」

「ティア……ごめん、油断した……」

「あたしの不注意よ、アンタに謝れると返ってムカつくわ
走るのは無理そうね…… 最終関門は抜けられない」

「ティア……」

「あたしが離れた位置からサポートするわ、そしたらアンター人は
ゴールできる」

「ティアっ!？」

「っさい! 次の受験はあたし一人で受けるってんのよ!」

「次って……半年後だよ!」

「迷惑な足手まといがいなくなれば、あたし一人の方が気楽なのよ!
わかつたらさっさと……っっ!？」

ティアは痛みを堪えながら、歩を進める。

でも、あたしはその場から動かない。

訓練学校時代からのコンビなのに、あたし一人が先には進めない。
ティアがあたしの方を向いて、あたしを叱咤する。

「ほらっ! 早く!」

「ティア……あたし、前にも言っただよね？」

弱くて、情けなく、誰かに助けてもらえばなしの自分がイヤだっ
たから……管理局の陸士部隊に入った

魔導士を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助け
の仕事に就いた」

「知ってるわよ……聞きたくも無いのに、何度も聞かされんだから
……」

ティアは、あたしに背を向けて、歩き始める。

「ティアとはずっとコンビだったから……ティアがどんな夢を見てるか……魔導士ランクのアップと、昇進にどれくらい一生懸命だったか知ってる」

ティアは背を向けたまま喋らない。

「だから！　こんなところで、あたしの目の前で！　ティアの夢をちよつとでも躓かせるなんてイヤだ！

あたし一人で行くなんて、絶対にイヤだ！」

「じゃあ、どうすんのよ！？　走れないバックスを抱えて、残り少しの時間で、どうやってゴールするのよ！？」

「裏技！　反則、取られるかもしれないし、ちゃんとできるかもわからないけど……上手く行けば二人でゴールできる！」

「本当？」

面と向かって聞かれると、かなり自信がなくなっちゃっただけど……（汗）。

「あ、えっと……その、ちょっと難しいかもなんだけど……ティアにもちよつと無理させる事になるし……よく考えたら無茶っぽいし……その、何て言うか、ティアが良ければっていうか……え、あの……」

「だぁー！ー！ー！ー！
イライラする」

大声で叫んだティアがあたしの胸ぐらを掴んで、はつきりと言った。

「ぶちぶち言っても、どうせアンタは自分の我儘を通すんでしょうが！

どうせあたしはアンタの我儘に付き合わされるでしょ！
だったら、はつきりと言いなさいよ！」

その言葉で、あたしの迷いは何処かに吹き飛んだ。

「二人でやれば、きっとできる！
信じて、ティア！」

やっとティアは、胸ぐらを掴んでいた手を離す。
そしてモニターを開いて、時間を確認する。

「残り時間、三分四十秒
プランは！？」

「うん！」

「なのはさん、どうします？
流れ弾に当たって、サーチャーが壊れたみたいですけど？」

試験の終盤、モニターを見てたけど、二人が壊し損ねたスフィアの
射撃を躲して、ティアナが転んだあたりから画面が砂嵐になる。

あの転び方は、ヤバいなあ……最悪、歩けないかもな。
途中までいい感じに進んでただけに、このまま終わらせるのは、可
哀相過ぎる。

「トラブルみたいだね
リン、一応様子を見に行ってみる」

「はいです！　お願いします！」

「（私もセットアップしますか？）」

「そうだね、念のため、お願いね、レイジングハート」

「わかりました。バリアジャケットを展開します」

俺も行ったほうが良いな。

「なのはさん、俺も行きます、フツヌシ、バリアジャケットを頼む」

「了解した、Set up！」

「風よ、我が身に纏い、翼となれ>翔駆<！」

これは爺さんに習った呪術とは違い、俺オリジナルの呪術。

魔法と組み合わせるのに、苦労したぜ。
言うなれば、風を上昇気流にして、落ちにくくする、補助輪のよう
な符術だ。

本当は、ちゃんとした飛行魔法があるけど、そっちはまだ訓練不足だからな。

体が浮かび、フラフラと体勢が崩れる。

「よ、よつと、とりあえず俺は、ライン曹長と合流します」

「私は、サーチャーが壊れた地点に行ってみるね」

俺は少しヨタヨタと、なのはさんは流星の様に飛び去った。
もつと訓練しないとなあ。

飛行直後の違和感にも慣れ、まともな飛行ができたあたりで、一人を発見する。

「ランスターさんか？ 映像を見た限りだと、足を挫いた様子に見えたんだがな？ しかも一人だけか？」

試験が続いているようで、見晴らしの良い大型の道路のど真ん中を走っている。

あれ！、何か違和感があるな？

「フツヌシ、あれって変じゃないか？」

「マスターも気付いたか、あれは……」

言い終わる前に、近くのビルから光弾が発射される。

あの攻撃は、確かこの昇進試験の最終・最大の関門『自立狙撃の大

型オートスファイア』だ。

一般的なBランク魔導士なら対処が非常に困難で、こいつのいる試験に当たった受験生は全体の半分近くが落ちると言われてる。って、Bランクの試験で、Bランク以下じゃ、対応できない関門を置くか普通？

「おっ、高速回避か、いやっ、違うなって、命中した!？」

スファイアの放った光弾が弧を描きながら、走っていたランスター二士に当たる。

「大丈夫だ、マスター、あれは幻術だ」

なるほど、さっきの違和感はそれか。
すると、道路の瓦礫から何人ものランスター二士が出てくる。
この全てが幻影かよ、魔力保つかな？

、龍騎君、二人は試験を再開してるみたいだね、

、ええ、ここからライブで見させて貰いますよ、

さてと、ランスター二士本人は何処かな？

おっ、いたな！

スファイアからは死角の位置にある瓦礫の影に、オレンジの魔方陣を展開していた。

どんな作戦か、気になるし、ほい。

「マスター、何を投げた？」

「まあ、聞いてな……よし、聞こえてきた」

「くつ、>フェイク・シルエットく、これ、滅茶苦茶、魔力を喰うだからね！ 余り長くは保たないんだから、一撃で決めなさいよ、でないと、二人で落第なんだからね」

さつき投げたのは「集音」だ。

周りの音を集めて、術者につたえるんだ。

「マスター、ストーカーだぞ」

言うなよ、少しあいつらの作戦が気になったんだからさ。どうやら、相方に念話を送ってるみたいだな。

えっと、相方は何処だ？

おっ、居たな。

道路からある程度離れた距離にあるビルの屋上に、彼女は立っていた。

データ通りなら、彼女に空戦スキルは無かった。

どうやって、あの距離を詰める。

ナカジマ二士に気付かれないように、上空に移動する。

何か、喋ってるな、独り言か？

この距離なら、風が声を運んでくれるな。

「あたしは、空は飛べないし、ティアみたいに器用じゃない、遠くまで届く攻撃も無い！」

なるほど、完全にガチガチの近距離型だな。なら、どんな作戦を用意したんだろ？

「出来るのは、全力で走る事と、近距離の一発だけ！」
クロスレンジ

ナカジマ二士の足元に近代ベルカ式の魔方陣が浮かび上がる。

「だけど、決めたんだ！」

あの人みたいに、強くなるって！」

右手のナツクルに付けられた車輪が回転を始める。

そろそろ、仕掛けるな。

「誰かを、何かを、守れる自分になるって！」

ナカジマ二士は、右拳を空に向かって掲げる。

車輪の回転は最高潮に達しているみたいで、ナツクルの周りに風が巻き起こっている。

「ウインググー—ロオオオドツ！」

高らかに叫び、ナツクルを眼前の地面に叩きつける。

ナツクルを叩きつけた場所から、帯状の魔方陣が走り、スフィアが設置されているビルまで延びる！

なるほど、ウイングロード（翼の道）ね

これが彼女が持つインヒューレント（先天性）魔法か！

あれなら、飛行出来なくても、文字通り『空を全力で走れる』な。

ナカジマ二士は、クラウチングスタートの体勢で、走りだす瞬間を待っている。

そんな時、ランスター二士の近くに設置した『集音』から声が響く。

「行つて！」

「行つくぞおおおおお！」

・その掛け声を合図に、ナカジマ二士がロケットの様に走り出す。

確か、ナカジマ二士のローラースケートは使用者の魔力で加速、減速が自由にできるんだっとな。

まさに、『空を翔る』と言う言葉にピッタリだな。

「おっとビルの中に入ったら、見えないからどうなってるのか分からん、フツヌシ、モニター」

「マスター、観客になってますよ」

うるせえ！ 分かってるんだよ！

モニターを見ると、スフィアの張った魔力防壁にナカジマ二士が右手を突き出していた。

「うおおおおおつ、でりゃあああ！」

防壁が堅く、何度かナックルのカートリッジをロードする。

そして、徐々に指が防壁に入り込む。

入り込む？ まさか！？

「ぬうあああああ、えりゃあ！」

もう少しで突き抜けるところで、ナカジマ二士は防壁を掴み、無理

矢理引き剥がす。

「アハハ、豪快過ぎる程の力押しだな」

防壁は形を失い、残るはスフィア本体のみ。

すかさず、スフィアが射撃を行うが、しっかりと腕で防御する。瓦礫を巻き込む射撃だったため、スフィアの周りに粉塵が舞う。その時の隙を狙って、ナカジマ二士は魔方陣を展開する。

ナックルの弾倉が回転し、二回のカートリッジロードを行う。

「切り札かつ!？」

「一撃………必倒おおお!」

水色の魔力球が形成され、魔力球を拘束するように、環状の魔方陣が発生する。

「まさか………あれは、なのはさんの」

俺は彼女が使おうとしている魔法に覚えがある。

ナックルの車輪が、限界近くまで回転する。

「デイベイイイイン………」

ナカジマ二士の右拳が、魔力球を打つ。

「バスタアアアアアアッ!」

なのはさんが最も得意とする砲撃魔法。

魔法体系が違うから、別の魔法だけだな。だけど、オリジナルとそっくりだった。

砲撃は真っ直ぐにスフィアに向かい、スフィアのその巨体を飲み込み、ビルの壁も貫通し、十数メートルの光の帯は消えていく。

射程はオリジナルより短い、威力は、俺の『クロスバスター』と同程度か、それ以上だな。

時間は、残り1分ちよつとだな。

頑張れよ、未来のお仲間さん！

最大の関門を通過した二人を残し、ゴール地点に向かう。

ゴール地点では、リンさんか心配顔で待っていた。

「大丈夫ですよ、リンさん！

今しがた、大型スフィアを破壊して、こっちに向かってますから」

「あつ、龍騎さん！」

「リンさん、試験官なんだから、どっしりと構えて待ちましょう」

「そ、そうですね！」

安心して脱力したリンさんを、宥めていると、二人が現れた。

ランスター二士はサーチャーが壊れた時から負傷したのか、ナカジマ二士に負ぶわれている。

抱えられながら、前方のターゲットを打ち抜く。

「はいっ！　今でターゲットオールクリアです！」

後はタイムの問題だけか。

「残り、何秒？」

「十四秒！ まだ間に合う！」

「魔力……全開いいっ！！」

ナカジマ二士が気合いを入れ、ローラーを更に加速する。

「あれ？ あの二人、凄い加速だが、どうやって止まるつもりだ？
この先は、壁だぞ？」

そうゴールの先は、壊れた道路が壁になっているのだ。
どうやら、ランスター二士も同じ疑問を感じたようだ。

「ちよっ！？ スバル、アンタ止まる時の事考えてるんでしょうね
！？」

「えっ？ うわぁ！？」

「嘘お……！？」

加速が止まらない。

まさか、止まる時の事考えてなかったのかよ！？
このままじゃ、時間内にゴールは出来ても、壁にぶち当たるぞ。

「あっ！ ヤバイです……」

「ヤバイじゃないでしょ、早く止めないと！」

凄まじい速度のまま、二人はゴールを通過する。
予想どおりに、減速する気配はない。

「その二人、すぐに止めてやるからなあ」

俺は、二人の進路上に立ち、胸の前で梵字を描き、風球を生成して投げる。

リンさんもデバイスを取り出して魔法を使おうとする。
リンさんは、人間に近い存在だからデバイスが使える。

>風よ、柔らかな堅牢となり、彼の者を包め、《風牢球》<

符が、周囲の空気を支配下に置き二人の動きを拘束し、球状の風の牢獄になる。

本来は、このまま火の符で攻撃して、中の敵を焼き尽くすのだが、
上手く加速を止められたみたいだ。

「>解放<！」

風牢球が解き風の球が弾け飛ぶ。

解放された二人は、重力に従って下に落ちる。

「きゃあつ、痛つ、もう、なんなのよお！」

「ふう、なんとか止まれたあ、ありがとうございます」

ま、荒っぽい方法になったけど、無事で良かったぜえ。

ナカジマ二士が、こちらを見ているのに気付く。

「うん、何か用か？」

「あゝの、あなたは？」

ああ、知らないか、おやつ！

「俺の紹介は後で！　まずは後ろを注目！」

二人は、そおつと後ろを向く。

二人の視線の先には、怒った表情のリンさんが浮いていた。

「むうううう！　二人共、危険行為で減点です、頑張るのは良いですが、怪我したら元も子もないですよ、そんなんじゃ、魔導士としてダメダメですよ！」

「えつと……？」

「……ちっさ」

あ、やっぱり誰でもそう思うか。

リンさんが、お説教に夢中になって、ランスター二士の発言が聞こえなかったのが、幸いな。

「まったく、もうっ！」

「あはは、ちょっとビックリしたけど、無事で良かった、龍騎君、ありがとうね」

「いえいえ、俺がしなくてもリインさんが何とかしましたよ」

さっきまで、俺の背後には桃色の網が張られていた。

俺が間に入ったから、無駄になったけど、なのはさんもしっかりと二人を助けようと魔法を使ってたようだ。

なのはさんが到着し、俺達の前に降りてくる。

「とりあえず、試験は終了ね、二人共、お疲れ様、リインもお疲れ様、ちゃんと試験官出来たよ！」

「わあい！　ありがとうございますっ、なのはさん！」

バリアジャケットを収納し、元の管理局員の制服へと戻るなのはさん。

リインさんもデバイスを収納して、一息つく。

「細かい話は後にして、ランスター二等陸士」

「あ、はいっ！」

「怪我は足だね？」

治療するからブーツを脱いで」

「あっ！　治療なら私がしますですよ」

早速、治療が開始したいのか、ランスター二士の前までリインさんが飛んで行く。

未だに困惑したままなのか、呆気に取られた顔で治療を受ける。

「なのは……さん」

呆けた顔でなのはさんを見るナカジマ二士。

そういえば、なのはさんが言ってたな、フォワード候補の一人は、昔自分が助けた少女いるって。

「うん？」

「あつ！？ 高町教導官……一等空尉！」

「なのはさんで良いよ、皆そう呼ぶから」

確かに皆、砕けた感じで接してたな、堅苦しいのが、苦手みたいだな……うん。

「四年ぶりかなあ……背、伸びたねえ、スバル」

まさか、覚えていたとは思ってなかつたみたいだな。

一瞬驚いた顔して、憧れの人が覚えてくれてた感動で、泣きかけてやがる。

「えと……あの……あの……」

「うん！ また会えて嬉しいよ！」

そう言つてナカジマ二士の頭を撫でる。

ああ、堪え切れなくなつて泣き始めやがった。
感動の再開は、ナカジマ二士にとってはサプライズ過ぎたみたいだな。

「私のこと、覚えていてくれたんだ」

「あの……覚えてるつて言うか、あたし……ずっとなのはさんに憶れてて……」

泣きながら、言葉を繋げる。

『アレ』は憧れが結晶になったものか。

「嬉しいな、バスターは見てちょっとビックリしたよ?」

「ああっ!?!? すみません、勝手に!」

勝手にコピーして、申し訳ないのか、頭を下げる。

ああ、その気持ち、すげえわかるわ。

俺も砲撃魔法作る時に真似したからな。

ナカジマ二士の慌てっぷりが面白かったのか、クスリと笑う。

「いいよ、そんなの」

俺が初めてクロスバスターを見せた時と全く同じ反応で狼狽えてるナカジマ二士を宥める。

まあ、せつかくの再開だ。

水差す気は俺にはないし、ランスター二士の怪我が気になるからな、ランスター二士の方へ歩く。

「リインさん、怪我は大丈夫そうですね？」

「大丈夫ですよ、軽い捻挫みたいで、私一人でも、問題ないです、あつ、ランスター二等陸士はなのはさんの事は知っていますか？」

「あつ、はい、知ってます

本局武装隊の『エースオブエース』、航空戦技教導隊の『若手ナンバーワン』、高町なのは、一等空尉」

「その話にちよつと足さなきやなどんな敵だと、全力全壊で全てをなぎ払うことから付いた異名が『管理局の白い魔王』、あつ、本人には言うなよ、ばれたら後が怖いから」

因みに、一等空尉は、俺の一等陸士から六つ上の階級。

空を飛べる魔導士なら、階級の『陸』が『空』に変わる。

知った時は、驚き半分、納得半分だったな。

「失礼すぎる事を言ってますが、あなた達を助けてくれたこの人が『月下の斬刀・草薙龍騎一等陸士』ですよ」

いつの間に、そんな異名が付いたんだ！

「今日は後学のために身に来てたんだ、よろしくな、ランスター二等陸士！」

「いえ、こちらこそ、そう言えば聞いた事がありますよ、貴男の噂

独特なインヒューレント魔法にたった3ヶ月の講習で、もう幾つか事件を解決した新人で、期待のエース候補

……お会いできて光栄です」

「君の方が管理局では先輩だから畏まる必要は無いよ
そろそろ、撤収の時間だな」

モニタから撤収時間を告げるアラームが鳴っている。
試験終了、後は結果発表と六課への勧誘だな。

勧誘と集合

管理局のオフィスビルの一室…

はやてさんとフェイトさんが受験者の二人に、六課設立までの経緯を説明している。

「とまあ……そんな経緯があつて、八神二佐は新部隊の為に奔走」

「四年ほど掛かつて、やっとスタートが切れた……と言つ訳や」

「部隊名は『時空管理局本局遺失物管理部・機動六課』！」

リンさんが自慢げに言うけど、よくまあ、長過ぎだよ部隊名。

「時空管理局本局遺失ぶ管理部・機動六課……やつぱり噛んだ」

「登録は陸士部隊、フォワード陣は陸戦魔導士が主体、特定遺失物の捜査と保守管理が主な任務や」

まあ、俺が聞いた『主な任務』がはやてさんの言うのとは、少し違うが黙っておくか。

「遺失物……ロストログიაですね」

「そう」

はやてさんの言葉をフェイトさんが繋げる。

「広域捜査は一課から五課が行うから、ウチは対策専門」

「そうですか……」

にしても……ナカジマ二士は困った顔でキョロキョロしてるが、まさか、理解できてない？

「それでは、スバル・ナカジマ二等陸士、それにティアナ・ランスター二等陸士」

『は、はいっ！？』

「私は……二人を機動六課のフォワードとして迎えたいで考える
厳しい仕事になるやろうけど、濃い経験が詰めると思うし、昇進機会も多くなる……どないやろ？」

二人は困惑した表情ではやてさんを見る。

そりゃそうだろうな、急にこんな話をされて。

今まで部隊でやってた仕事もあるし、いきなり別の部隊に移動して欲しいと言われて即答できんわ。

迷いを断ち切るためか、フェイトさんが声を出す。

「スバルは高町教導官に直接魔法戦を教われるし、執務官志望のティアナには、私でよければアドバイスとか、出来ると思うんだ」

「あ、いえ……とんでもない

……と言いますか恐縮です、と言いますか……」

あら、執務官志望って、案外いるんだな。

「あ、龍騎君、話は終わってるかな？」

「今、スカウトの話を出してるみたいですよ、一応の区切りは付いたみたいですけど」

「そう、じゃあ、龍騎も来る、試験の結果を発表するんだけど…」

「気になりますし、お邪魔でなければ」

「問題ないよ」と言って、部屋の中に入っていく。
俺も六課の人間として、続く。

「えっと、まだ取り込み中かな？」

念のためにはやてさんに入室していいか聞く。

「あつ、平気だよ」

はやてさんが場所を詰めて、座れる場所を開ける。

俺は、入り口近くの椅子に座る。女性ばつかの中に入って平然としていられるほど、俺の神経は太くない。

なのはさんが二人の前に座り、結果を発表する。

「とりあえず試験の結果ね」

二人共、技術はほぼ問題なし

でも危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています」

うわあ、一瞬笑顔を浮かべたナカジマ二士の表情が一転して暗くなつたな。

コロコロと表情が変わる子だな。動物なら、まるで柴犬だな。

それにくわえてランスター二士の表情は余り変わらないな。
小さい変化で何となくだが、考えてることが分かるが。

「自分やパートナーの安全だとか、試験のルールを守れない魔導士が、人を護るなんて……できないよね？」

なのはさんの横でリンさんも頷く。
俺も同意見だしな。

「だから残念ながら、二人共不合格」

哀しい結果が二人に通達される。

二人の表情が暗くなる。

まあ、努力の結果が実を結ばなかったからな。

「なんだけど……」

なのはさんが前言を撤回する。

どうやら、酌量の余地があるようだ。

「二人の魔力値や能力を考えると、次の試験までの半年間もランクに扱いにしておくのは、却って危ないかも、と言うが私と試験官の共通見解」

「ですう！」

まあ、実力に対してランクが低い事がなにかしら問題があるらしいな。

にしても、半年に一回って、俺って6つも飛び級でランク上げたん

だな。

「と言うことで、これ」

そう言つて、なのはさんが封筒と何かの用紙を出す。
はつきり見えないけど、何かの紹介状だな。

「特別講習に参加するための申込用紙と推薦状ね
これを持つて、本局で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから」

二人は用紙となのはさんを交互に見る。
不合格かと思えば、いきなり再試験の話を出されて困惑してるのが簡単に見て分かる。

「来週から、本局の厳しい先輩たちにしっかりと揉まれて安全とルールをよく学んでおこ？
そしたらＢランクなんて、きっと楽勝だよ……ね？」

満面の笑顔で二人を激励する。
俺の時と同じで、厳しいだけじゃない。
押さえつけるだけじゃなく、伸びやすくするための鞭だと、はつきり分かった。

『あ…ありがとうございます！』

「合格するまで試験に集中したいやる？
私への返事は、試験が済んでからつてことにしようか？」

二人は立ち上がり、はやてさんに敬礼する。

綺麗に話がまとまったみたいだな。

「さてと、龍騎君、折角、見学したんだから、見解を聞かせて貰おうか」

「……………えっ！」

なのはさん、何と仰いましたか？俺の見解って？

「言っただしょ、今日は『お仕事』だって」

「そ、そんなあ〜」

「文章としてまとまって無くてもいいから、試験で思ったことを言っ
つて」

まあ、感想として幾つかあるので述べさせてもらおう。

「え〜、慣れてないから二人を不快させるかもしれないんだけど…
……」

出来るだけ言葉を選んで、感想を話す。

「まずはナカジマ二等陸士

限定的にだけと空戦可能なのは強みになると思っし、味方の足場にもなる

だけどオートスフィアのバリアを無理矢理引きちぎるのは無茶苦茶過ぎるから、バリアブレイクの習得に力を注いだ方がいいと思う
あれは近接系のスキルだし、格闘主体のナカジマ陸士ならピッタリ
だと思っ」

「アハハ……そっち方面は苦手で…」

「次に、ランスター二等陸士

マルチショットの命中率も悪くなかったし、冷静な判断も出来ていた
ただ、幻影魔法だっけ、案外魔力を食うみたいだし、精密射撃魔法
も消耗する魔力が大きいだから、今後は効率的な魔力運用を心がけ
た方がいいと思った

……以上です」

「そうですね、やっぱり……ありがとうございます」

何とか終わった……感想に不備がないか、なのはさんを見る。

「その見解は、広い意味で正論ねでも、人によつての適正を考慮に
入れてないから、場合によつては反感を買いかもしれないよ？
そこは気をつけてね」

それから、二人を送り出し、一息ついていると、はやてさんに通信
が入った。

モニターに俺を気絶させた女性シグナムさんが映っていた。

「あ、シグナム

どないしたん？」

シグナムさんは、毅然とした態度ではやてさんと会話している。
無理矢理気絶させられた俺は、フェイトさんに聞いてみた。

「シグナムさんって、どんな人ですか？」

「はやてが個人的に所有している戦力の一人だよ
階級は二等空尉、機動六課ではライトニング分隊の副隊長だよ
因みに龍騎はライトニングだよ」

「げえ、あの人が直接の上司かよ……割り込むか。」

「お久しぶりです、シグナムさん」

嫌味たっぷりに挨拶した。

「貴様はあの時の！」

「その節はどうもお世話になりました、管理局入りの張本人さん」

「あの時は済まなかった」

「まあ、いいですよ、もう、許してますから」

「あゝの……管理局入りの張本人って、どういう事や？」

「シグナムさんに有無を言わずに気絶させられて、クラウドディア
にそのまま護送させられたんです

その後、リンディさんにスカウトされました」

「シグナム、あんたは」

「怒らなくてもいいですよ、そのお蔭でこうして管理局員になれましたから」

「すまなかった」

「だから、いいですよ、もう、許してますから
ところで、そろそろ変わりますね」

「待ってや、龍騎君！

実は、シグナムと一緒に、ライトニング分隊の残り二人を連れて来てくれんか？」

「分かりました、分隊のメンバーと副隊長に挨拶出来ますから」

「そんなら、次に会うのは六課の隊舎やね」

「ですね、それじゃお疲れ様です！」

「うん、お疲れ」

「お疲れ様」

「お疲れ様、またね」

「次は隊舎で会いましょうです！」

それぞれの言葉で送られて、イクサリオンで待ち合わせ場所まで急ぐ。

オフィスビル自体が空港から近かったため、思ったより早く到着できた。

入り口でシグナムさんを探す。

モデル並の身長だから、すぐに見付かった。

「お久し振りで、機動六課ライトニング分隊所属、草薙龍騎一等陸士です」

「久し振りだな、シグナムだ、あの時は済まなかった」

「通信でも言いましたが、もう気にしてませんよ」

合流を果たすと、すぐに空港内に入る。

シグナムさんが言うには、ライトニングに配属される残り二人は、別世界の人間で、今日が初顔合わせになる。

一体、どんな奴だろう？

エスカレータを登り、エントランスに入ると赤髪の少年がこちらに向かつて走って来て、シグナムさんの前で止まり、敬礼する。

「お疲れ様です！ 私服で失礼します、『エリオ・モンディアル』三等陸士です！」

こいつが、フォワード候補の一人か……。

子供なのに六課に来れるって事は、高い実力の持ち主だな。

「遅くなって済まない、遺失物管理部機動六課、シグナム二等空尉だ
長旅、ご苦労だったな」

続いて俺も敬礼して挨拶する。

「同じく、草薙龍騎一等陸士だ
宜しくな！ 気軽にタメ語でいいぜ、エリオ！」

「はいっ、よろしく願います！ 龍騎さん」

あれ？ 確か二人の筈じゃ？

シグナムさんも気付いたのか、エリオに聞いている。

「もう一人は？」

「はい、まだ来てないみたいで……あの、地方から来るとのことです
ので迷っているのかもしれませんが
探しに行ってもよろしいですか？」

真面目な子供だな……俺がこのくらいの年頃だったと言えないな。

「頼んでいいか？」

「はいっ！」

「シグナムさん、俺も探してきます」

「ああ、頼む

名前は、『キャロ・ル・ルシエ』これが写真だ」

渡された写真には、桃色の髪に薄紫の瞳の少女が写っていた。

年は十歳ぐらいでモンディアル三士と同じくらいだ。

何だか、若いつて言うより、幼い人が六課に多いな。

まあ、実力はあるんだろうな。

写真を片手に少女を探す。

「ルシエさんっ！」

管理局機動六課新隊員のルシエさん！

いらっしやいませんかあ？」

「ルシエ三士さん！
機動六課の者です！
どこですかあ？」

エリオと共に空港内を探すが一向に見つからない。

「やっぱり、何処かで迷っているんでしょうか？
龍騎さんの方はどうでしたか？」

「こつちも駄目だ、キャロ・ル・ルシエ三等陸士……っ！
いたら返事してくれえ！」

少し自棄になつて声を張る。

まあ、返事が無いとわかつてるのにな。

「はあいつ！」

私です……遅くなりましたあ！」

無いと思つたけど……あつたよお返事！？

声がした方を向くと、エスカレータの上からフードを被り、大きなバックを持った少女が慌てて降りて来ているところだった。
ハハハ、マジかよ、ラッキー。

「ルシエさんですね？
僕は……」

エリオが駆け寄るが！？
慌てて降りたことが、原因か、ルシエ三士が足を躓かせる。

「フツヌ……」

「S o n i c ソニックムーブ
M o v e」

加速魔法で助けようしたが、俺より早くエリオが行動した。

まるで雷みたいに、エスカレータの側面に当たりながら、ルシエ三士を抱き抱える。

そのまま上に上がり、いざ着地というところで二人の体が死角に入る。

「あつ、詰めを誤ってミスって転んだな」

加速魔法は、姿勢制御より着地や停止の瞬間が最も難しい。

急ブレーキを掛けると進行方向に向かつて、重力が掛かるのだが、この重力を緩和させるのに、失敗すると、今みたいに変な着地、つまり転んでしまう。

「衝撃吸収の特性も入ってるから、大丈夫だと思うが……一応見に行くか」

様子を見るためにエスカレータをで上に上がる。

やはり着地に失敗したのか、二人が折り重なるように倒れていた。ほう、少女に怪我をさせないために、先んじて自分の体をクッション代わりにしたか……男だな。

「あいてて……すみません、失敗しました」

「いえ、ありがとうございます」

「助かりました……？」

「ん……？ あっ！？」

おやつ、エリオの様子が変だな。

何か、焦ってやがる。

ここからじゃ、ルシエ三士の体が影になって分かん。

「あ、すみません！
今、どきます」

「ああっ！？ あの、こちらこそすみません」

何だか微妙に話が噛み合っていないな。

まあ、いいか。

二人共に、見たところ外傷はないし。

「二人共、大丈夫だったか？」

足を挫いたとかは、見た目じゃ分からないからな。

『問題ありません』

良かった良かった。

うん、ルシエ三士のバッグがゆらゆらと動いてる。

え……？ 何か、いる？

そうしているとバッグの口が開き、中からとんでもないのが、現れた。

「キュッ……」

「ああ、フリードもごめんね
大丈夫だった？」

「キョクル」

バッグから出てきたのは、小さいぬいぐるみみたいな……。

「なあ、エリオ、あれって？」

「はい、多分」

『竜の……子供！？』

二人揃って呆氣にとられる。

なあ、エリオ

何ですか、龍騎さん？

お前も、ビックリドッキリするよいな秘密ないだろうな？

……

沈黙は肯定にとられるから、そういう時は、嘘をつけ
俺は聞いても驚かん

ってか、こっちに来てから驚いてばかりだからな。

ありがとうございます

「あのお、すみませんでした
エリオ・モンディアル三等陸士でしょね？」

「あつ、はい！」

この時になって、ルシエ三士は、フードを外す。
ここで別人だったら、それはそれで笑い話だな。

「初めまして、『キャロ・ル・ルシエ』三等陸士であります
この仔は、『フリードリヒ』、私の竜です」

「キュ」

「「よろしく」って言ってるぜ
フリードにも挨拶してやれよ、エリオ」

あれ、二人ともどうした驚いた顔しやがって。

「どうした、お前ら？」

「竜の言葉分かるんですか？」

「ちゃんと合っていましたよ」

ああ、そう言う事か。

「分かるよ、その前に自己紹介だ！
機動六課、ライトニング分隊所属の草薙龍騎一等陸士だ
まあ、気軽にタメ語でいいぞ、なあ、キャロにフリード」

キャラは笑顔で挨拶に応える。

本当に二人共、まだ子供だなあ……。

まあ、エリオの加速魔法はそうだし、ファンタジー最強を欲しいままにする竜を操ったり……才能と実力に溢れた期待の新人だな。

「さて、シグナム副隊長も待ってるし、行こうか」

『はいっ！』

何とか追求を躲せたな。

配属

あれから一週間後。

遂に完成機動六課の隊舎のロビーには、多くの人が集まっていた。ナカジマ二士達も、無事にBランクを修得し、六課参入を決めた。フォワード陣は、なのはさん率いる>スターズ分隊<の四人とフェイトさん率いる>ライトニング分隊<の五人の計九人となった。特に隊長と副隊長は四人全員揃って、オーバーSランクかニアSランク。

戦闘には不備のない布陣だ。

まだ、課長であるはやてさんが来てないから、ロビーは色んな人達の自己紹介などで騒がしい。

勿論、新人フォワードの五人も、これから、自己紹介だ。

「じゃあ、まずは私から！」

スターズ分隊のスバル・ナカジマ二等陸士です

ポジションは、フロントアタッカーで得意技は格闘戦です！

あと、インヒューレント魔法が使えたりします

次は、ティア！」

ナカジマ二士がランスター二士を指差す。

心底嫌そうな顔をした後、自己紹介を始める。

「はー、ティアナ・ランスター二等陸士です。

ポジションは、センターガード、射撃と幻影魔法を主に使用します」

「ティア、愛想良くしようよ？」

これから、一緒に戦う仲間なんだしさ？」

「うつさい！　あたしはあんたほど馴れ馴れしく話せない人間なの！」

流石は長年コンビ組んでるだけに入りにくい空気を作り出しやがった。

「あつ、思い出した！」

「龍騎さん、どうしたんですか？」

俺がいきなり声を上げたため、エリオが聞いてくる。
俺は聞かれないために、念話で話す。

>まあ、見てなく

「おい、ずつこけコンビ！」

「その名で呼ぶなって、何で知ってるのよ」

「それは後で！」

エリオ、続きだ」

「はい、エリオ・モンディアル三等陸士です
得意な事は……特にない……かな？」

ポジションは、ガードウィングです！

まだまだ、若輩者なので色々迷惑を掛けると思いますがよろしくお
願いします！」

エリオが礼をして、終わる。

じゃあ、次はお「キュクル」」

俺が言おうとするとフリードが目の前に飛んできて自己主張する。どうやら、主人に自己紹介させたいらしい。なら、希望に答えますか。

「キャラ、先は譲るな」

「あつ、はい！」

キャラ・ル・ルシエ三等陸士ですポジションはフルバックで……この仔はフリードリヒです！

余りお役に立てないかもしれませんが、よろしくお願いします！」

主従揃って礼をする。

面白い光景だな。

さてと、俺の番か。

「草薙龍騎一等陸士だ

ポジションは、ナカジマ二士と同じフロントアタッカーで、符術というインヒューレント魔法も使える

ここで提案なんだが……」

皆を見てから、提案を発表する。

「エリオとキャラは基本的に堅過ぎ、よってお前等を含めた全員、基本的にタメ語で話せ」

「はあ、何よそれ？」

俺の提案を聞き、ティアナが訝しむ。

、二人には聞かれたくないから、念話で話すぞ

スバルにティアナ、一週間程こいつらと生活したが、こいつら基本的に人に甘えないし、受け答えは遠慮してか全て敬語だ
お前ら、この二人の歳でこれをどう思う？、

、有り得ないわね、

、だから、基本的にタメ語にして遠慮を無くすんだよ、

、分かった、

スバル、お前はどうか？
って、目を回しとる！、

、ほつときなさい、難し過ぎるのよ、この能天気バカにわね、

、確かに、能天気バカだな、

今までの行動から、能天気バカなのは、すぐに分かる。

「まあ、難しく考えずに友達になろうって事さ、なあ、エリオにキヤロ！」

『はいっ！』

「スバルにティア！」

「うんっ！」

「いきなり、あだ名？……まあ、いいか、はい」

ツツコミは無視な方向で、皆を見る。

「まあ、よろしくな！」

『よろしく！ 龍騎^{さん}』

「八神二佐が到着したぞ
整列、整列」

濃い茶髪の男性が声を出す。
並んでいる時に、俺に話し掛けてくる。

「上手くまとめたじゃねえか、俺は『ヴァイス・グランセニック』
だ！ まあ、よろしくな」

「よろしくお願いします」

「多分お前らとは一番会うことが多い人間だ
詳しい自己紹介はその時にだ」

そう言つて、列の中に入っていく。
会うことが多いか…… 部署は何処だろう？

首を傾げていると、隊長陣が到着し、課長であるはやてさんの話が
始まるうといていた。

姿勢を整えて、耳を傾ける。

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長八神はやてです」

全員が拍手で祝福する。

拍手が止み、再びはやてさんが口を開く。

「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくのが私達の使命でありなすべき事です

実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォワード陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤード陣、全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています

ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで
機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

再び拍手がロビーに響く。

集まっていた人達は持ち場に戻り、俺たちはなのはさんが早速初訓練を始めようと言うので、着替え外へ。

「そう言えば、もう自己紹介は済んだ？」

「はい、皆揃って友達になりましたよ！」

親指を立てて返答するが、ティアがため息をついているのは、無視だ。

「じゃあ、準備運動代わりに皆は外回りを……軽く三十周してこゆ
うか」

『はいっ！』

軽く走り始める。

お互いの息遣いだけがやけに耳につき、もくもくと走る。

俺も訓練校での準備運動でスタミナがついてるけど、まだまだ足りないな。

最後の一周が終わる頃、隊舎の外れにいるのはさんを発見。
その横には、シャーリーさんがいる。

「皆、ランニングが終わったらかっちに集合ね」

『はいっ!』

揃って俺達は返事し、なのはさんの元へ集合する。

視界の先には湖があり、その中心に埋め立て地のような足場がある。
対岸にはかろうじて、ビルが並んでいるのが見えることから、相当
な広さが確認できる。

なのはさんは、俺達が調整のためにと渡していたデバイスを返却す
る。

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるから少
しだけ大切に扱ってね

それとメカニックのシャーリーから一言」

「えー、メカニック兼機動六課の通信主任の『シャリオ・フィニー
ノ』一等陸士です

みんなは『シャーリー』って呼ぶので、良かったらそう呼んでね」

俺の時とほぼ同じ内容の自己紹介だな。

てか、俺と同じ階級だったんだ。……シャーリーさんって。

「皆のデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々訓練を
見させてもらったりします

あ、デバイスについての相談があったら遠慮なくいつてね」

なら、カートリッジシステムの事を後で聞か。

資格持ちだが、機材がないのでカートリッジシステム用のデバイスはまだ作っていないのだ。

「じゃあ、早速訓練に入ろうか？」

「え……ここで、ですか？」

目の前に埋め立て地のようなフィールドがあるが、訓練するには殺風景過ぎる。

なのはさんは、シャーリーさんに何か目配せする。

「はい」

シャーリーさんが手を振ると、幾つもモニターが表示され、操作していく。

すごいよなあ、『超科学』

「機動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦シュミレータ……ステージセット！」

そう言つて、一番大きい端末に触れると、殺風景な埋め立て地はその様相を大きく変える。

立体映像によつて廃ビルが立ち並ぶ廃都市が生まれる。

シュミレータだから、ただの映像じゃないだろう。

それから、前衛・後衛に別れて互いのデバイスについて話す。

「あたしのこのローラーブーツは魔力で動く奴だから、自由に加速と減速が出来るだ

で、こっちがりボルバーナックル、カートリッジシステムが入って

るから、先陣は任せてね」

「ああ、試験でも使ってたな
エリオのはどんなんだ？」

エリオのは身の丈程の槍を使う近代ベルカ式の騎士だった。
ガードウィングだから、スピードに関してはフォワードの中ではト
ップだろう。

「僕のは『ストラダ』って言って、人格型のストレージデバイス
です」

僕の戦闘スタイルはハイスピードで攪乱して、その隙を就くのが基
本です」

タメ口になってくれるとは思ったが、まだ少し遠慮して丁寧語が少
し混じってるな。
ま、仕方ないか。

「なるほど、それで龍騎は？
すごいインヒューレント魔法を使うって聞いているけど？」

それに対して、スバルお前は解放的だな。
元々の性格だろうな。

「龍騎？ どうしたのボーっとして？」

スバルが顔を覗き込む。

「あつ、悪い、考え事してた
俺の戦闘スタイルだったな、フツヌシ」

「Standby lady set up
(スタンバイレディ、セットアップ)」

ペンダントが光り、刀となり手に握られる。

「こいつが俺の相棒の『フツヌシ』だ
ほら、挨拶しろ」

「よろしくな！」

「戦闘スタイルは剣術をメインとして魔法と呪術はサポートだな
呪術は論より証拠！ >風牙壁<」

俺が胸の前で梵字を描くと、風の壁が俺達を覆う。

「これが呪術だな、攻撃、防御、補助と何でもござれだな……ただ
遠距離が少し弱いのが弱点だな
この呪術で攻撃を防げるから、フロントアタッカーになったみたい
だ」

「へー、何か一種の魔法体系みたいだね」

「詳しくは知らんが、創始者はこの呪術で召喚もしてらしい
『式神』ってやつらしいがな」

「へえー、さすがですね」

僕にも何か凄い魔法があればな」

「アホ、俺は特殊過ぎるんだよ」

エリオはエリオなりの個性を身に付ければ良いんだよ」

雑談になり始めたみたいだから、話を戻すか。

「まあ、呪術だけなら、近・中距離まで戦える
得意なのはやっぱりクロスレンジだけだな」

暫らくして、後衛組と合流して、互いの陣形について話し合う。
主な指揮と中衛はティアが担当し、キャロはフリードと共に後衛で
援護。

前衛は充実しているので、先陣は俺とスバルのツートップ、エリオ
が遊撃、と言う形になった。

「そろそろ訓練を開始するけど、打ち合わせは終わった？」

タイミング良く、なのはさんが話し掛ける。

「まあ、まとまった所ですね
後は臨機応変って事ですか」

「じゃあ、皆訓練場に入って」

初訓練（前書き）

ちよつと間が開きました、この作品は自分の二作目なのですが、元々別のサイトで連載してましたが規約により非公開にされたので、移植しました。

初訓練

しかし、このビルは本物みたいだな……エイッ！《ガキッ！》……マジで欠けたよ、リアル過ぎ。

「それじゃ皆準備は良いかな？」

念話じゃないな、備え付けの通信か？

「私達の主な任務は搜索指定ロストログアの保守管理……その過程で相手をするのが……これ!!」

魔方阵が幾つも目の前の地面に現れ、そこから俺には見慣れた機械が出てくる。

「自立行動型の魔導機械、これは近付くと攻撃してくるタイプね」

「機動六課初の訓練、ミッション目的、逃走する10体の魔導機械の破壊又は捕獲」

『ミッション、スタート』

「はああ！」

スバルが逃走する魔導機械に頭上から魔力弾を放つが…。

「何これ、動き速！」

あっさり躲され、驚愕する。

エリオは槍を構え、魔導機械に疾走しながら、攻撃を躲していく。
「だあああ！」

跳躍して槍を振り、真空波で攻撃するが、柳のようにふわふわと躲される。

「駄目だ、当たらない」

「ちんたらしてると後ろの負担！」

フツヌシで斬り掛かり、風船の様にふわりと躲されたところに鞘での第二撃、双龍閃もどきつてな。

前衛、分散し過ぎ！！ 後ろのことも考えて！

ごめん

「ちびっ子、威力強化お願い」

「はい、ケリユケイオン」

「ブーストアップ・バレットパワー」

キャラがケリユケイオンを翳すとブースト魔法が発動する。

「シュート」

ティアナの足元にミッド式の魔方阵が浮かび上がり、アンカーガンの銃口に魔力弾を形成し発射する。

魔力弾は魔導機械に当たる寸前で、何かに掻き消される。

「バリア!？」

「違います、フィールド系」

「やっぱり、AMF……でも、これって訓練用だろう……シミュでそこまで再現できるのか？」

、「AMFって?」、

、「Anti Magilink Field アンチマギリング
フィールドの略称、魔力の結合を無効化する」、

龍騎君は気付いたみたいだね、そうアンチマギリングフィールド、
魔力の結合を無効化するから、普通の射撃は通用しないし…

「待あってーって、うわぁー!!」

、スバルって、猪武者?、

ウィングロードを発動し追走するが、AMFを全開にされたことで、
ウィングロードを消され、ビルに突っ込む。

、正解よ、

、ティアナ、同情するわ、

、ありがとう、

AMFを全開にされると、足場作りや気象操作は困難になるよ…

スバル大丈夫？

「な、何とか」

> A M Fを破る方法は、幾つもあるよ……皆、よく考えて動いてねく
なのはがウィンドウを見ると丁度歩道橋の上でエリオが槍を構えて
いた。

「行くよ、ストラダ、カートリッジロード……ハアアア！」

エリオはストラダを何度も歩道橋に振り抜き、橋を崩落させる。

魔導機械は崩落を避けるために上昇するが…。

「でえやあああー!!」

待ち構えていたスバルが拳を叩き込むが魔力を消され、威力激減。

「あっちゃー、魔力消されちゃうと威力でないや、ならー!」

後ろに迫った魔導機械に振り向き様に、足でマウントポジションに
して、拳を叩き込み、中から破壊する。

「流石だけど年長の意地があるからな、 銀一閃!」

無銘で、魔導機械に横一文字に斬撃を放ち、二つに破壊する。

「連続行きます、>フリード、ブラストフレア<」

「キュ、クウ！」

キャロの合図で、フリードが火球を生成し、ビルの屋上から魔導機械に放つ。

「>我が求めるは、戒める物、捕える物、言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖、錬鉄召喚、アルケミックチェーン<！」

三機程、炎から逃れるために上昇するが、キャロの召喚した鎖に捕らえられる。

「凄い、召喚つてあんな事も出来るんですか!？」

「器用だね、無機物操作も加えてるし……育て方一つで伸びるね」

ティアナはビルからビルに飛び移りながら、魔導機械を二機追い掛ける。

、スバル、上から仕留めるから、そのまま下から追つて、

「こっちは射撃型、無効化されてはいそうですかって引き下がってたら、生き残れないのよ！」

、本命の弾体を幕条の外殻で包む、フィールドを抜けるまで外殻が保てばいい……固まれ、固まれ！、

「ヴァリアブルシュート！」

アンカーガンの銃口に魔力弾を生成、更に幕条の外殻を形成し、発射された魔力弾はAMFを抜け、二機の魔導機械を破壊する。

「ティア、ナイスだよティア流石！」

「スバルうつさい！ これぐらい当然よ」

ティアナはそう言いながら、仰向けに倒れる。

「凄いね、A Aランクの魔導士スキルなんだけどな」

「A A!？」

訓練終了…。

「疲れた」

「もう動けない」

「……………」（ダウン中）

「……………」（ダウン中）

「基礎トレやってても、流石にキツイわ」

この後、体力が回復した五人（エリオ、キャラはティアナとスバルにおぶわれて）隊舎に戻り、晩御飯を食べて明日に備えて就寝。

六課での日々

機動六課隊員オフィス

> 隊員呼び出しです

スターズ分隊、スバル・ナカジマ二等陸士

同ティアナ・ランスター二等陸士
ライトニング分隊、エリオ・モン
ディアル三等陸士

同キャロ・ル・ルシエ三等陸士

同草薙龍騎二等陸士、10分後にロビーに集合して下さい<

「呼び出しなんて初めてだね、何だろうねえ？」

「はいっ」

「ティア、行こ」

「あゝ、今行く…」

「あ、筋肉痛い？」

「まあ、少しね」

「なのはさんの訓練、ハードだもんな」

「今まで結構鍛えてたつもりだったけど、あの指導を受けると
まだまだ、甘かったんだって思うわ」

スバルとティアナはは苦笑いしながら、訓練を振り替える。

「あのランスター二士、よろしければ簡単な治療をしますが…」

「ああ…ヒーリングも出来るんだっけ、お願いしちゃおうかなあ」

「はい…」

「あ、あ、あゝ効く効く……！」

「二人は平気？」

「はい、なんとか…」

「全然平気」

「流石、ちっちゃくても騎士だねえ、今度組み手でもしてみようか？」

「宜しくな、スバル」

「はい！ お願いします、ナカジマ二士、イエーガー二士」

エリオの返事を聞き苦い顔をするスバルと龍騎。

「あゝ楽になったゝ、ありがとね、キャラ」

「恐縮であります！」

こちらも返事を聞いて苦い顔をするティアナ。

「確かにね、チームメイトなんだし、もうちょっと柔らかくていいよ、階級付きで呼ばなくても」

俺を含めて三人が固いと評価、てか固過ぎるよ……マジで10歳かエリオ？

「では、何とお呼びすれば……」

「普通に名前だろうが、つかマジでタメ語で頼む、その歳に敬語はマジで止める」

「あたし達はスバルとティア、龍騎は「普通に呼び捨てで頼む」だつて」

「良いんでしょうか？」

「妥協点見付けて、妥協しな」

「では、スバルさんと」

「ティアさんで」

「で、龍騎s「龍騎だ、それが嫌なら龍兄だ」、じゃあ龍兄で」

「行こうぜ、後二分だ」

『はいっ』

ロビー…

「はい！ 皆さん、集まりましたね、今日の午前中は訓練無しということで、八人に六課の施設や人員なんかを紹介していくですよ」

『はいっ』

「他の皆は、初日にオリエンテーションをやったですが、五人はなのはさんの訓練でしたし」

「みっちりやってみました！」

「でも、お陰で最低限の基礎は終わって、今日から本訓練のスタートだとか」

「え”っ！」

「今なんか凄いことを、聞いた気が！」

「あはは〜！ 楽しみだね〜！」

「僕等もです！」

「では、案内するですよ」

『はいっ！』

部隊長室…

「訓練ももう四日目か、新人達の手応えはどないや？」

「五人ともいいね、かなり伸びるよ、あの子達」

「そっか、伸ばしていく方向も大分見えてきたし、こっちで勝手にしていいかな？」

「構わんで、伸ばしていく方向はどういうん？」

高速機動と電気資質、突破・殲滅型を目指せるGWのエリオ

一撃必倒の爆発力に頑丈な防御性能、FAの理想型を目指していくスバル

二騎の竜召喚を切り札に、支援中心に後方魔導士の完成形を目指していくFBのキャロ

射撃と幻術を極めて味方を生かして戦う戦術型のエリートガンナーになつてく筈のCBのティアナ 剣術をメインに呪術と魔法を用いた突撃からの殲滅型のFAを目指していくアグニ

「の以上かな」

「何処まで伸びるか、楽しみだな……アイツ等が完成したら凄い事になるな」

「楽しみや」

「五人のリーダーは誰になるんやろ？」

「ティアナで決まりじゃないかな、熱くなりやすいけど、視野は広いし、指示も正確、自然に皆を引っ張ってるしな」

「ええ感じやね」

「ただねえ、ライトニングの方は経験不足以外は問題ないんだけど……スターズのコンビがね」

「『一撃必倒』って感じで、揃って凄い突撃思考なんだよな」

「ここは厳しく教えていかないと」

「そうだね、今すぐでも出勤出来くはないけど、後一週間くらいはフル出勤は避けたいかな、確実に安全な戦術を教えなきゃいけないからな」

「平気や、その為の隊長・副隊長の配置やし、新人達の配置については、なのはちゃん達の裁量に全面的にお任せするわ」

「ありがとうございます、八神部隊長」

食堂前：

「はい！ こちらの食堂で案内は一通り終了です……食堂の使い方はもう分かってますよね？」

『はいっ』

「ちょうどお昼休みです、これにて解散としましょう」

『ありがとうございます！』

「じゃあ、お昼食べちゃおうか」

「うん、エリオ達も一緒に……」

「スバル、ちょっといい？」

「はぁーいつ、先に食べてて！　すぐ合流するから」

スバルは、アルトに呼ばれて、其方に向かう。

「ん」

『はい！』

『……………』

「なあ、お前等さ、全然喋らないな？」

龍騎は、エリオ達二人に三日前からの疑問をぶつける。

「え」「あ、そ……そうでしょうか！？」

「だ・か・ら、敬語は止めろと言っただろうが！」

「痛、痛、ストップ、ストップ」

龍騎はエリオの背後から自分の左足をエリオの左足でフックさせ、エリオの右腕の下を経由して、自分の左腕を首の後ろに巻き付け、背筋を伸ばすように伸び上がる……これぞ、コブラツイストだ！

「痛、痛、痛いですッ……痛いよ」

龍騎に睨まれ、敬語を慌てて、タメ口に直す。

「兄弟みたいな奴らだろうが、お前等、タメ口位で話せよ」

「分かった」「分かりました」

「うん、女子に使える関節技は何が有ったかな>ポカン！<痛！」

「いい加減にしろさい！」

ティアナが頭頂にチョップして、龍騎を黙らせる。

「さっさとお昼にするか？」

「そうだね」

食堂…

「お前等、マジで話とかしないのな？」

龍騎は、黙々でお昼の準備をする二人に告げる。

「スバルみたいには言わんが、隊員同士のコミュニケーション位は取つといた方が良さぞ」

「それは分かるわ、俺がこいつ等の歳でも、これは無いわ」

「てか、目の前でされると自分が不自然なのかと思えてくるのは幻想か？」

「大丈夫、それが普通だから」

「ありがとうございます」

「最初は話が合わないのは当然、お話してる内に、色々分かってくるもんね」

「頑張りましょう、ルシエさん」

「頑張るであります、モンディアル三士！」

「真面目に泣いていいですか？」

「泣いていいわよ、私もそうだし」

「お前等な、その言い方も止めろ！普通に名前で呼び合え！」

「た……例えば？」

「真剣にぶちギレていいか？」

龍騎は余りの質問にこめかみに青筋を浮かべる。

「どうしたの、龍騎？怖い顔して？」

用事から戻ってきたスバルにティアナさんが龍騎がキレる理由と経過を説明。

「確かにぶちギレるね、普通に名前で呼び合えば良いのに……例えば、>行くよキャラ、>うんエリオくん！<とかで良いんじゃないの？」

『が、頑張りますっ！』

この後、しっかりお昼を食べて、午後の訓練でグッタリになったフ
ォード達でした。

.

ファーストアラート

「じゃあ、今日の訓練の総まとめシュートインベーションやるよ、今から五分間、俺の攻撃を避けきるか一撃当てればクリア、非弾したらやり直し」

「>D Shooter<」

レイジングハートを構えたなのはさんが、魔力弾を自身の周囲に生成する。

「このぼろぼろの状態で、なのはさんの攻撃を五分間避けきる自信ある？」

「無い！」 「同じくです！」 「無理！」

スバルにエリオ、龍騎はきっぱり言い切る。

「なら、一発当てよう」

「行くよ、龍騎、エリオ」

「了解」 「はい！」

「決まったみたいだな、ミッション、START！」

「全員絶対回避、二分以内に決めるわよ」

なのはは魔力弾を数発、固まっていたフォワード達に放つが牽制目

的だったので、当たらない。

幾つかの魔力弾を生成し、周囲に停滞させる。

スバルがウィングロードで突っ込むが停滞していた魔力弾で迎撃されるが、魔力弾はスバルを貫き、スバルは消える。

「フェイクシルエツト、やるね、ティアナ」

感心した様になのが呟く。

「龍騎、行くよ」

「了解」

突然、なのはの背後にウィングロードが伸びる。

「うおおおっ！」

滑走するスバルが唸りながら拳を握るが、障壁を展開し受け流され、魔力弾がスバルを追う。

「このバカスバル、危ないじゃない、今撃ち落とすから」

ティアナの銃口に魔力弾が生成され、スバルを追う魔力弾を狙うが

……

ガチッ！

トリガーを引いた瞬間、鈍い音と共に魔力弾は霧散する。

「い”っ!?”」

ティアナは蛙を踏んだような声を出す、要は弾詰まり。

「嘘だろ、>火燕く!」

龍騎が左手に火球を形成、瞬時に火の燕と化して掃射して、魔力弾を撃墜。

「助かった」

「フォローに入る身にもなってくれ」

「ごめん」

「援護行くぞ」

「了解」

「>ペガサス Shot<」

高速直射の魔力弾がなのはに迫るが、障壁を展開して防ぐが、煙幕が張られ警戒している間に、スバルと龍騎は姿を暗ます。

「エリオ、キヤロ、準備は良いか?」

龍騎はなのはより上のビルの屋上に移動し到着すると、エリオ達に念話を送る。

「ごめん、後もう少し必要」

「分かった」

「>我が乞うは、疾風の翼・若き槍騎士に、駆け抜ける力を・ブーストアップ・アクセラレーション<」

ストラーダに強化魔法がかかるとブースターが起動して、推力が生ずる。

「あの、かなり加速付いちゃうから気を付けて!」

「大丈夫!」

キャロがエリオに気を付ける様に訴えるが、微笑んで返すとなのはを見据える。

「準備完了」

「分かった、3」

「フリード、>ブラストフレア<、

龍騎はフツヌシを腰から抜き、大上段に構える。

「2」

フリードが火球を発射して、ゲイルの注意を引く。

「1」

……0……

「>スピードアングリフ<！」

「炎騎一閃！！」

エリオはブースターを吹かしてなのはに突撃、龍騎は屋上から飛び降りてフツヌシをなのはに振り下ろす。

ドゴンっ！！

煙の中から、エリオと龍騎が飛び出て、エリオはビルの窓枠に掴まり、アグニは解除されていないウィンググロードに着地する。

『MISSION COMPLETE』

機械的な音声が響き、外したと思っていたティアナは啞然とする。

「お見事、ミッションコンプリートだよ、ちゃんと障壁を突破して入ってる、こっちもね」

ジャケットの胸元の小さな黒い筋を親指で差し、背中を見せる。背中には、斜めに黒い筋が入っていた。

「フオワード、整列」

『はい！』

「午前中の訓練はここまで、隊舎でシャワー浴びて、お昼にしよう

か？」

「キュツクル」

何処からか焦げた匂いがし、フリードも落ち着かないようである。

「スバルさん、ローラーから煙が」

「うわっ！ あっちゃ……無茶させちゃったあ」

スバルは脱いだローラーブーツを大事そうに抱く。

「ティアナ、アンカーガンの調子は？」

「はい、もう騙し騙しです」

「ん、チーム訓練にも慣れてきた頃だし、そろそろ実戦用デバイスに切り替える頃合いかな？」

「……よし、お昼終わったら、デバイスルームに集合ね」

『はい！』

シャワールーム…

「ティアナさんとスバルさんは、自分でデバイスを組んだんですよね？」

「うん、あたしは戦闘スタイルがあんなだし」

「アタシはカートリッジシステムが使いたかったからね」

一方……ロビーでは

「皆、遅いな」

「エリオ、女性は身支度に男性の倍はかかる……覚えとて損は無いぞ」

シャワーを終わらした男性陣でこんな会話が為されていた。

デバイスルーム

「これが……」

「アタシ達の新デバイス」

「ストラーダとケリユケイオンには変化無しか」

「みたいだね、エリオくん」

スバル達は目の前に浮かぶ新型デバイスを眺めながら呟く。

「はぁーい、設計主任は私、協力、なのはさん、レイジングハートさん、リイン曹長」

シャーリーがさも嬉しそうに手を挙げながら言う。

「違うですよー！」

リインがエリオの頭の上に着地し、エリオの言葉を否定する。

「二人はちゃんとしたデバイス経験が無かったので、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたですよ」

『アレで、最低限!!』

リインの言葉を聞き、驚くエリオとキヤロ。

「俺のも変わりなしか？」

「龍騎さんには、ある方達からカートリッジシステム搭載のデバイスが届きましたよ、差出人は第13技術班なんですが……13技術班って聞いた事無いんですが」

「第13技術班？あの人達か」

「知り合いなんですか？」

「俺のバイクの製作者達だ、信頼出来るので見せて貰えますか？」

「実はフツヌシにもう搭載しちゃいました（汗）」

「早いですよ、シャーリーさん」

「御免ね、後スバルのデバイスにはリボルバーナックルのシンクロ機能と瞬間装着機能付けといたから、持ち運び楽だよ」

「ありがとうございます!」

「ごめん、ごめん、遅れちゃった」

「丁度、皆のデバイスを見ていたところです、機能説明を今から……」

その時、アラームとパトランプに加えモニターに`^ a l e r t ^`の文字が表示される。

>フワードチーム、こちら、はやて、新型が出て来るかもしれへん、初めからハードやけど行けるか？<

『はい！』

現場に向かうヘリの機内は対照的に別れていた。

初陣でガチガチに緊張した星と雷組と暴れられるのが楽しみなの
一名。

「お前等、緊張し過ぎ……ガチガチだと落とされるぞ」

確かに緊張していて落ちる場合がある。

しかし、キャラは緊張より、何かに震えているようだ。

「キャラ、力は確かに誰かを、何かを傷つける……でもな、それは使う者の意志次第だ、守る力か、壊す力か、どちらを選ぶかは、使う者の意志が決める」

「……………」

「（やはり、無言か） キャロ、君はどちらを選ぶ？」

龍騎の質問に無言で答えないキャロ。

新デバイスでぶつつけ本番かよ、大丈夫かな。

「アルト、ルキノ、サーチャーを空へ！！」

「ガジェット反応、空から！？」

「ガジェット航空型、か、数200、お、多い！！」

「ヴァイス君、私とフェイト隊長で空を抑える」

「うつす、なのはさん、お気をつけて！」

「キャロ」

「は、はい！」

「皆通信で繋がってるし、危なくなったら助け合えるから、ね？」

「は、はい」

「それじゃあ、行ってくるね」

スターズ1、高町なのは一等空尉、行きます」

へりに組み込まれたヴァイスのデバイス、ストームレイダーが開けたメインハッチから、宙に身を躍らせる。

「レイジングハート、Set Up」

なのはがデバイスを起動すると桃色の球体が包み、晴れると白いインナーにジャケット、ミニスカート、腰辺りから前が開いたロングスカートを着て、手には愛杖、レイジングハート・エクセリオンが握られていた。

、レイジングハート、

>Yes、フライヤーフィン<

なのはは加速して、ガジェット航空型の編隊に向かう。

.

星と雷

首都から高速で飛行してきたフェイト隊長と合流し、ガジェットを捕捉する。

どうやら、三機編成らしく、ガジェットは別れて、三人にレーザーを放つ。

しかし、なのははひらりと回避し、>Short Busterシ
ョートバスター<>砲撃<でガジェットを落としていく。

フェイトは>Haken Saberハーケンセイバー<>魔力弾
<でガジェットを切断して、落としていく。

「おつし、お前等、隊長達が空を抑えてくれるお陰で、無事降下
ポイントに到着だ、先ずはスターズ行つて来い！」

『はい！』

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

『行きますす！』

スバルとティアナは空に身を躍らせる。

「行くよ、マツハキャリバー」

「お願いね、クロスミラージュ」

『Set Up!』

スバルは黒のへそ出しインナーに裾の短いジャケット、短パンに右腕にリボルバーナックル、足に新デバイスのマツハキャリバー（ローラーブーツ）を装着。

ティアナはミニスカートのワンピースのような黒のインナーの上にノースリーブの白のジャケットで、両手にクロスミラージュ（銃）を握る。

「行きますか、キャロこれをやるよ」

龍騎は懷から、一枚のカードを取り出しキャロに渡す。

「俺特製のマジックカード、キャロ用に最適化してあるから問題なく使える筈だ、使う事も無いと思うけど一応な……じゃあ、頑張れよ、お前等！

ライトニング05、草薙龍騎一等陸士、出る！」

龍騎は空へと身を躍らせる。

「フツヌシ、Set Up!」

龍騎はお馴染みのバリアジャケット、左腕にヘカトン、左腰に鞘に収まったフツヌシを装着する。

「チビ共、行けよ!」

「二人で降りようか?」

キャラの不安を感じ取ったエリオが優しく手を差し伸べる。

「うん!」

キャラは差し伸べられた手を握り頷く。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャラ・ル・ルシエとフリードリヒ」

『行きます!』

二人は手を繋いだまま、空に身を躍らせる。

「ストラダー!」

「ケリュケイオン!」

『Set Up』

エリオは赤い服に白のコート、足に鉄製のブーツ、手にはストラダーを握る。

キャラはピンクの服に白のコートと帽子、両手にケリュケイオン（

グローブ）を嵌める。

「あれ、このジャケットって？」

「ふふん、スバル達のジャケットは各分隊長の参考にしてるですよ
クセはありますが、高性能ですよ龍騎さんは、今迄のを使ってます
が」

スバルの疑問に答えたのは一緒に降下していたリイン曹長だった。

「へえ〜！！」

「スバル、感激は後、来るわよ」

「分かったよ、ティア」

「行くよ、キャロ！」

「うん、エリオ君」

「とつとと片す！」

各分隊ずつ打ち合わせをしていく中で、空では既に機影は半数以下
になっていた。

スターズ：スバルside

「ウオリヤー!!」

スバルはリニア車内で、壁を利用した三次元な動きでガジェットを破壊していく。

「リボルバーシュート!」

威力が強過ぎたのか、屋根を破って、車外に放り出される。

「Wing road・(ウィングロード)」

マツハキヤリバーが直ぐ様、ウィングロードを自動展開して、飛ばされそうになったスバルを屋根に戻す。

「凄いね、マツハキヤリバー、グリップ力とか格段に良いよ!」

「私はマスターを走らせる目的で造られましたから、当然です」

「ちょっと違うかな、アタシとマツハキヤリバーは相棒なんだから、一緒に走ろう」

「同じ意味に聞こえますか?」

「同じじゃないから、これから覚えていこう、マツハキヤリバー」

「了解」

ティアナside

「はぁー!!」

ティアナは、遮蔽物を上手く利用してガジェットを撃ち落としていく。

「凄いわね、クロスミラージュ、弾道補正に多重弾殻の形成までしてくれるなんて、便利過ぎるのに頼るのは嫌いんだけど」

「必要有りませんでしたか？」

「此方としては大助かりよ、ありがとう、クロスミラージュ、ワンハンド」

「ワンハンドモード」

左手の複製を消して、本体だけに握り締める。

「駄目です、コードの破壊、効果有りません！」

「なら、コントロールルームで手動で操作しますです、ティアナはスバルと合流してください」

「分かりました、行くわよ、クロスミラージュ」

「了解、マスター」

ライトニング side

「うりゃああああー!!」

「うぜええええー!!」

「やる事無いね」

「ギョク」

エリオとアグニの二人でガジェットを次々に倒していくので、やる事の無いキャロとフリード。

ロングアーチ

「スターズ01、ライトニング01、制空権獲得」

「ガジェット? 型、散開開始、追撃サポート開始」

ロングアーチは、現在副司令のグリフィスを中心にフォワード陣のサポートに回っている。

「スターズ、両目で合流

「ライトニングF、八両目突入、……っ、エンカウント!、新型です!」

モニタにエリオ達にアームを伸ばして、襲い掛かる大型ガジェットが映る。

「エリオ、退け!」

前に居たエリオを退かして、伸びてきたアームに斬り付ける。

「くっ、堅い」

「はあああああ！」

エリオが魔力光に包まれた刃で本体に斬りつけるが…。

「やっぱり堅い！」

直ぐに凹みもしない、上にAMFを発動され、魔力が霧散する。

「キャラ、危ないっ！」

ガジェットはキャラにアームを伸ばすがエリオが庇い、しかし別の帯電ケーブルがエリオを襲い、意識を刈り取る。

ガジェットはアームでエリオを巻き取り、谷底へと落とす。

「エリオくううんっ！」

「キャラ！？ 嘘だろ！？ うわっ！」

キャラに注意を奪われたため、アームに弾き飛ばされる。

「ち、畜生！ 飛翔符」

背中に銀色の翼が現れ、飛翔する力を与える。

「先に落ちたあいつ等は何処だ？……っ？」

眼下に桃色の光が入り込む。

巨大な魔力球となったそれは、キャロから放たれ、エリオを包み込む。

「蒼穹を奔る白き閃光。我が翼となり、天を翔けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！！」

詠唱が響き、桃色の魔力球が弾ける。

その中から、成体となり、雄々しく咆哮するフリードが大翼を広げる。

「凄っ！って、慌てて離れてる」

抱き締められてたのが、気が付いたエリオが慌てて、キャロから離れてる。

「こっちも合流だな」

エリオ達の下へと飛翔する。

「大丈夫か、二人共？」

「龍騎、空飛べたの？」

「苦手だがな、昔から何度か落ち掛ける、ともかく、一撃ぶっ放せ、キャロ！」

「うん、フリード、>ブラストレイ<！」

「ガオオン！」

フリードが小竜時とは桁違いの巨大な火球を生成する。

「ファイアッ!!」

砲撃の如く、巨大な火炎が射線を燃やし、団子ガジェットにぶつかる……が、ガジェットはAMFを発生させ自身を防御する。

「やっぱり、固い」

「あの形状は砲撃じゃ貫き辛いよ、僕がやる」

「僕じゃなくて、俺等だろ、エリオ、キャラ俺がやったマジックカードを使ってみな、それと必殺技をかますぞ」

「分かりました、龍騎さん

「うん、龍騎さん!」

エリオはストラダを構え、フリードの肩の辺りに立つ。

キャラはフリードの上で詠唱を始める。

「我が乞うは青銀の剣、若き槍騎士と銀詠の剣士に、祝福の刃」

「Enchant up field invade」

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

「Boost up strike power」

「行くよ、エリオ君、龍騎さん」

「了解つ、キャラ、でえやあああ!!」

エリオは、掛け声を上げ、リニアに跳び移る。

二重の強化魔法でキャラは攻撃力を底上げする。

「ツインブースト、スラッシュアンドストライクッ!」

「受諾」

ストラダとフツヌシに桃色の光が宿る。

「カートリッジロード」

ストラダの刃を立て、ブースターを吹かしながら、片手で構える。

『一撃必中!!』

エリオはブースターを目一杯吹かし突撃、龍騎はフツヌシを左腰に構え突撃する。

『でえやあああ!!』

龍騎はフツヌシを横一文字に一闪、エリオはガジェットの上部にストラダを突き刺し、そのまま上に担ぎ上げるように斬り上げる。

「やれ、キャラ!」

「はい！竜炎よ、鋭い槍へとその姿を変えよ、《竜槍炎》！」

槍となった竜炎が大型ガジェットを貫き爆散させる。

エリオはストラダーを振り、魔力刃を払う。

… ロングアーチ…

「ライトニングF、ガジェット撃破」

> リニアのコントロール復帰です、今から止めますですよ<

「スターズF、レリック確保」

ロングアーチのモニタにガジェットを破壊したライトニングFが映り、スターズFがレリックのケースを持っている姿が映る。

「初任務クリアやな、スターズとリインはヘリに回収して貰って中央のラボまでレリックを護送、ライトニングは現場待機、現地局員に事後処理の引き継ぎや」

> 了解！！<

とあるラボにて

> 刻印 N o . 9 護送態勢に入りました、次の戦力を送りますか<

「止めておこう、レリックは惜しいが、貴重なモノ見れたからね」

星と雷（後書き）

えゝ、遅くなりましたが、キャラの新魔法の紹介です

「竜炎よ、鋭い槍へとその姿を変えよ、《竜槍炎》」

龍騎が試しに作ったら上手く出来たフォワード用に最適化した呪術
これはキャラ＋フリード（覚醒）用の呪術

出張任務1

異世界出張任務（by機動六課）

目的地：第97管理外世界、現地惑星名称『地球』

目的：現地にて確認されたロストログアの確保、及び封印

持ち物：所有デバイス

現地活動可能な服数着

お菓子や飲み物（300円まで）

お小遣い、5000円まで

それ以上を求める場合は部隊長まで

現地協力者の援助により、生活場所は確保

.

………何処の子供の遠足のパンフだよ、部隊長！！

つい先日渡された出張任務の案内はこう書かれていたのだ。

現在、転送ポートに向かってヘリで移動中…。

「管理外世界へ出張任務なんて、ガジェットやレリックが出たのかな？」

「六課は対策班ですから、一応念の為にでしょう」

「エリオやキャロは何度も行ってる世界だし、なのはさんやはやて部隊長の出身世界だね」

俺の出身世界でもある……師匠との封印は大丈夫かな？

「そうなんだ、第97管理外世界、文化レベルB、魔法文化無し、次元移動手段無し……魔法文化無いの！？」

「無いよゝ家のお父さんも魔力0だし……でも、なのはさんや八神部隊長、龍騎は？」

「アタシ達は突然変異って言うか、たまたまなあゝ感じかな」

『へえゝ』

「魔法との出会いなんて人それぞれ千差万別だよ」

偶然と言つ名の……必然だろう。

「はい、リインちゃんのお洋服」

「わー！ シャマル、ありがとですーっ」

その会話に皆、顔を向ける。

皆に『謎』と言つても良いような光景があつた。

「あの、リインさん、その服って……」

「はやてちゃんのちっちゃい頃のおさがりですよ」

「あ、いえ、そうじゃなくて……」

「何か、普通の人のサイズだなんて……」

正しくその通りだ、エリオやキャロが着るには少し小さいが、紛れもなく子供服。

対して、ラインの身長はおよそ30cm程。皆には違和感バリバリなのである。

皆にはどうひねって考えても、着ることは不可能なサイズなのだ。

「うーん……あつ、フォワードの皆には見せたことが無かったですね！」

『へっ？』

「システムスイッチ、アウトフレーム・フルサイズッ！」

『おおっ！』

「デカっ！」

「いや、それでも小さいよ」

「大体、エリオ達と同じ位の身長だな」

「向こうの世界には、ラインサイズの人間もふわふわ飛んでる人間もいねえからな」

「ライン曹長、いつもそのサイズでいた方が便利なんじゃないですか？」

「この姿だと燃費と魔力効率が悪いんですよっ、コンパクトサイ

ズで飛んでる方が楽チンなんですよ」

『成る程！』

この後、はやて部隊長とザフィーラ以外の守護騎士は途中で降りた…… おそらく、現地協力者への挨拶だろうな。

そうこうしている内に、第97管理外世界に直結する転送ポートに到着した。

P.T事件、闇の書事件と立て続けにロストロギア事件に関わった（それも第一級ロストロギア事件）世界として、管理局内を席卷した事態を重く見た管理局上層部によって、直ぐ様直結の転送ポートが作成、設置された。

もつともこの世界出身の高等魔導士2名、生活する高等魔導士1名の存在も転送ポート作成にも関わっている。

「とまあ、こんな訳で直結の転送ポートが存在するんだ」

なのはさんやフェイトさんと馴染み深く、人気無い処に転送されると思ったが、湖畔のコテージだったため、転送ポート作成の経緯を皆に説明。（まあ聞きかじりだけだね。）

にしても、綺麗な青い湖に緑輝く森に湖畔のコテージ……任務だよな、観光じゃないよな。

「ここがなのはさん達の故郷か……」

「そうだよ、ミッドと余り変わらないでしょ」

「空は青いし、太陽は一つだし……」

「山と水と、自然の匂いもそっくりです」

「てか、此処は具体的に何処ですか？ 湖畔のコテージって感じだが……」

「現地の住人所有の別荘だよ、捜査員待機所としての使用も快く承諾してくれたよ」

「現地の方……」

すると、湖の反対側からエンジン音が聞こえてきた。此方に来ることから、その現地の方だろう。

暫くすると一台の普通車がやってくる……ドライバーは女性だな。

「自動車？ こっちにもあるんだ」

ティアナ、こっちにも自動車くらいあるぞ……次元世界での経験が少ないのか？

まあ、ここまで科学が発達していて、魔法が無い世界は極めて稀だな。

すると、車から一人の女性が降りて……げえっ！！

「なのはっ！ フェイトっ！」

「アリサちゃんっ!」

「アリサっ!」

車から降りてきた女性は金髪ショートにブラウンのパンツルック。

マジかよ……現地協力者な上に、あの二人の幼なじみかよ。

「うん? 龍騎?」

「お、お久しぶりです、アリサさん」

「へえ、局員になったんだ」

「アリサさ、んっ、こんにちはです」

「リイン、久しぶり!」

「はいですうっ」

和やかな雰囲気な四人と、こちらの六人は完全に蚊帳の外。

フォワード陣はどうしようかと迷っている様子。（龍騎は自己紹介の後に早々に離脱）

「紹介するね、私となのは、はやての友達で幼なじみ」

「アリサ・バニングスです、よろしくね」

『よろしく願います!!』

「初めまして」

「……ねえ、なのはにフェイト」

「うん？」 「何、アリサ？」

「こいつは何時、管理局員になったのかしら？」

「龍騎くんを知ってるの？」

「管理局員になる前に通ってた学校は私立聖祥大付属高校ですが、それが何か？」

『えっ!?!』

「気付いていないようですが、俺は皆さんの後輩です、今は任務を優先しましょう」

「じゃあ改めて、今回の任務の概要を簡単に説明するぞ」

『はいっ!』

「探索区域は……此处、海鳴市の市内全域、反応の有った場所は、こことこことここ」

「移動してますね」

「誰かが持って移動しているか、独立して動いているかは、判らな

いけど、対象のロストロギアの危険性は不明、レリックだとしても魔力保有者はこの世界には少ないから、暴発の危険性は無いよ」

「しかし、対象のロストロギアがどういうモノかは不明ですから、魔導士の可能性も否定できないぞ、最悪の場合も覚悟しておけよ」

「相手はロストロギア、場所が市街地だし、何が起こるか分からないから気を引き締めてね！」

『はいっ！』

「確かに、独立稼働型のロストロギアは訳が分からんのもあるしな」

「回収任務したことあるの？」

「師匠に連れられて行った世界で、遭遇したこのタイプのは、動きながら花を撒き散らす、水中で魚を威嚇する……後はその他諸々、探して虚しくなったロストロギアが多数」

「悲惨だね」

「そうでしたよ」

「……では、副隊長達には後で合流してもらうので、先行して出発したやおう、あ、一応私服でね、市街地を探索するから」

『はいっ！』

「あっ、すみません、この各地点のロストロギアに酷似した反応が

あると思いますが、余り気にしないで下さい」

表示された地図の七ヶ所にマーカーをふっていく。

「何かあるの？」

「師匠と一緒に戦った魔人？の類ですかね、そいつ等が休息してますから、師匠でも扱いに苦労してたんで目覚めたら俺でも抑えられるかどうかは分かりせん」

「それ程の奴等なのか？」

「人間の七つの大罪、傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲を拝していて、武器戦で右に出る者無しと謳われた連中ですから、気を付けて下さいね」

「それ等を見分ける方法は有るのか？」

「全ての封印は祠か社ですので、近寄らないようにしてれば、いいかと思います」

「では、そうしよう」

「そうしてください」

出張任務2

現在、隊別に分かれサーチャーの散布中。

龍騎はバイクがあるので一旦実家に帰ってから任務に参加した。

「リイン、久しぶりの街はどう？」

「うーん、やっぱり懐かしいですう、なのはさんは？」

「私は懐かしいっていうより、>あれ？ 仕事なのに帰って来ちゃったくみたいな感じかな」

道路に沿いながら、一般には不可視のサーチャーやセンサーを設置していく。

「つーか、ミッドのちよつと田舎の辺りとあんまり大差無いわね、街並みも人の服装も」

「うーん、私は好きだな、こういう感じ」

>ロングアーチからスターズとライトニングへ

さつき教会本部から新情報が届きました……ロストログアの所有者が判明、運搬中に紛失したとの事で、事件性は無いようです、本体の性質も逃走のみで攻撃性は無し
ただし、大変に高価なものだそうで、出来れば無傷で捕えて欲しいとの事ですく

>まあ、気い抜かずにしっかりやろつ<

『了解っ！』

「ちょっと、肩の力抜けたかな？」

「はい」

「ほっとしました」

「と言うか、そろそろ日も落ちてきましたし、晩ご飯の時間ですね」

「ライトニング、そっちはどう？」

「こちらライトニング、こっちも一段落付いたから、待機所に戻るよ、ロングアーチ、何か買って帰ろうか？」

>こちらロングアーチ、有り難いことに現地協力者の方が夕食を用意してくれるそうや<

>うん、了解、じゃあスターズの皆を車で拾って帰るね<

「ありがとつ、フェイト隊長、……うん、でも手ぶらで帰るの何かな」

<俺は何処で合流すればいいですか？>

「駅前に翠屋って喫茶店があるから、そこでどうかな？」

>いいですよ、じゃあ<

なのはは、携帯を取り出し、何処かへ電話を掛ける。

「あつ、お母さん？　なのはですっ」

『へっ？』

「にやははは、うん、お仕事で近くまで来てね……そうなの、うん、ほんとすぐ近く、でね？　現場の皆に……」

、なのはさんの……お母さん？、

、そ、それは、存在してて、当然なんだけど……、

「さて、ちょっと寄り道」

「はいですう」

「あのー、今お店って……」

「うん、そうだよ、うち喫茶店なの」

「喫茶翠屋、おしゃれでおいしいお店ですよ」

『ええええつつつ！？』

確かにおしゃれな喫茶店が一軒。

「お母さーん、ただいま」

「なのはーっ、お帰りーっ」

、お母さん、若っ！、

、ホントだあー、

「なのはさんのお母さん、お久しぶりですう」

「まあリンちゃん、久しぶり〜！」

更に姉と父親が出てくる。

「あ、この子達、私の生徒だよ」

「お茶でも飲んでゆっくりしてね」

「……えっと、あつ、スバル・ナカジマですっ！」

「ティアナ・ランスターです」

「お久しぶりです、士朗さん、桃子さん」

「スバルちゃんにティアナちゃん、それと久しぶりの龍騎君」

「二人共、コーヒーとか紅茶とかいけるかい？」

「あつ、はい」

「どっちも好きですよ！」

「皆、お仕事大変そうだから、元気の出るミルクティーね」

「あつ、自分は【いつもの】でお願いします」

その後、なのはさんを気にする両親の質問を受けたが、なのはさんは本局でも評判良い実践教師。

二人のF（特にスバル）が事実を尾びれをつけながら語っていく。

、なんか……なのはさんが普通の女の子に見える、

、何か、新鮮ですね、

、それが普通だって、いつも上司と部下、先生と生徒だからな、いつもよりそれが大きいんだろ、

、ああ、成る程、

この後、ロングアーチへのお土産を貰ってコテージに帰還。

「ほな、今後の機動六課の平和と日本の海鳴市の平和を祈りつつ、かんぱ〜い!!」

『かんぱ〜い!!』

乾杯して暫らくしたら、大食漢が揃うバーベキュー台は……。

「ちょっとスバル、あんたさっきから肉食べ過ぎ!!」「え〜だつて……ってああああ、ね、狙ってたお肉がああ……」

「ふっ、甘いでえスバル!

>バーベキューの網の上は常に戦場や、周囲を警戒し、尚且つ常に自分の領分はしっかり守護するく

バーベキューの基本中の基本や!」

「了解ですう、八神部隊長!」

「ヴィータお前も少し食べ過ぎだぞ？……貴様っ、私の焼いていた肉を全て取りおって！！」

「ハッ、あめえんだよシグナム、はやても言ってただろう、『バーベキューの網の上は常に戦場』だってな」

……そう、正に戦場と化していた。

大食漢のスバル、ヴィータを中心とした肉取り合戦。

もう一つの網の方は少食だろうか、子供組となのはさんとその友人達が居る。

「何か凄い事になってるな」

何か任務が二の次に成ってないか？？

せんとつ準備!?

夜のバーベキューパーティーも終わり、仕事に移行する……と思うたがあのはやて隊長の事だ、絶対何かあると勘ぐる。

「お風呂どうする？ 此処には無いわよ」

「湖で水浴びって季節でもないし」

「そうすると……やっぱり……あそこですかね？」

「あそこでしょう？」

やっぱりか、多分、あそこ、とは風呂・入浴施設だろうから、あそこだな。

「さて、機動六課一同、着替えを準備して、銭湯準備っ！ これよ、市内のスーパー銭湯に向かいます」

「スーパー……」

「セントウ……？」

向かう先は「スーパー銭湯」と呼ばれる場所、市内に存在し10年前にオープンした所謂入浴施設込みとした娯楽場である。

当然、車で移動だ。（自分は遠慮してバイクで移動……何か嫌な予感がしたからな……）

三台の車とバイクに乗車……ドライバーはアリサ（さん付けするな

と言われた」とエイミィさんとフェイトさん。

それぞれ、性格の出た運転だったらしい。

エイミィさんとフェイトさんはまだ良い方だが、交通法規って何それな運転だよな、アリサって。
よく捕まらないな。

アリサの車に乗ったメンバーは、到着したら見事に目を回してた。
嫌な予感はいったったか（汗）。

「はーい、いらっしやいませー海鳴スパクーアへようこそー……
団体様ですか？」

「えっとお……大人13人、子供4人です」
「エリオとキャロと……」

「わたしとアルフです」

「あのお、ヴィータ副隊長は……」

「あたしは大人だ」

「すみません、訂正です、大人12人、子供5人です」

「はい、分かりました」

「てめえ!？」

「はいはい、大人振るのはもう少し大きくなってからな」

痛っ、クソいくら勘に触ったからって弁慶は無しでしょう。

案内されたのはロビーだったが、またも問題発生。

「広いお風呂だって、楽しみだね、エリオ君」

「あ、うん、そうだね、スバルさん達と楽しんできて」

「……えっ、エリオ君は？」

「ぼ、僕は一応、男の子だから」

「うん……でも、ほらっ、あれを見て」

入浴施設のご案内の一文だな。

「えっと何々、>女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみで
お願いしますくだとさ」

、龍騎さん！ ちょっと助けて！！、
観念して、キャロと一緒に風呂に入れ、
後生ですから、助けて下さい！！、
しかし、キャロ恐るべし！！

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

「フエイトさんっ!？」

、エリオ、俺先に入ってるわ、
えっ!!、

『はいつ!』

、スマン、エリオ、

この後エリオは何とか誘いを振り切り、男湯に進入できた。

「……え〜っとお〜……あ、あつた!」

「しかし、本当に良かったのか？」

「はい、向こうだと落ち着いて入って入れそうに無かったので」

「……確かに、でもエリオ、覚悟だけはしておけよ」

「アグニ、それはどういう意味？」

「そのままの意味だ」

すると、ドアを開ける音がしたら、聞き慣れた声とおばさんの声がしてきた。

「は〜い、どうぞ」

『ありがとうございます』

「……………えっ!？」

「やっぱり来たか」

龍騎は何と無く予想していたため、そのまま動くが、エリオは反対に予想外の声を聞き、サツと振り向く。

エリオの目に映ったのは、女湯の管理者と思われる女性と長めのタオルに身を包んだキャラだった。

「……………」エリオ思考停止中

「キャラ、キャラ、キャラ!? こ……こつち、男湯! 男性用!」

「女の子も11歳以下はこつちに入ってもいいんだって、一緒に入るっ」

、知ってましたね!!、

、案内をよく読んでなかったのか、その下にちゃんと書いてあったぞ?、

、へっ!、

、ちゃんと読まなかったお前が悪い、観念しろ、

、そ、そんなあゝ、

「お前等、先に入ってるぞ」

結局、キャラは男湯に入ることになり、エリオは始終顔を真っ赤に

させていた。

うん、子供用露天風呂か…… 12歳以上の男子立ち入り禁止か、良いモンめっけ。

「キャロ、あそこに『子供用露天風呂』なるものがある、三人であそこに行つて、親睦を深めてこい」

「えええええ！？」

「に、兄さん！？」

「ちゃんと待つて！？」

「四の五の言わずに行つて来い」

『は、はい！』

ちよつと怒気を出して、エリオを威嚇、キャロに手を引かれていくエリオを見送った。

「アイツ等、何か壁が有ったからな、ちよつど良い機会だな、兄弟で、チームメイトなんだから仲良くすれば良いのに」

あの後、二人が子供用露天風呂に行った事を龍騎がフェイトに密告、エリオが女湯に拉致。

長い入浴…… 本当に長い入浴を終え、女性陣が一斉に出てくる。エリオは後に逃亡。龍騎が哀れんでアイスを奢った。

出張任務3

風呂上がりの休憩中にクラールヴィント、ケリユケイオンがロストログリア反応を感知。

リインもエリアスキャンをすかさず行い、ロストログリア反応の地域を特定する。

「おつ、仕事だね、頑張つて来てね!」

「フェイト、エリオ、キャロ、気を付けてな?」

「うんっ!」 「はいっ!」

「先にコテージに戻ってるね?皆しっかりねっ!」

『はいっ!』

「ティアナ、シャル先生とリイン、はやて隊長にオペティック・ハイド」

「了解っ!」

「空に上がって結界内に閉じ込めるわ、中で捕まえてっ!」

『はいっ!』

「ほんなら、スターズ&ライトニング、出勤やあ!」

『了解っ!』

直ぐ様現地に急行して、結界を展開、ロストログアの行動を抑止する。

攻撃性はないが、貴重で高価だというロストログア、無傷で捕獲はそれだけで難易度上昇だぞ。

<第一戦闘空間、河川敷グラウンドに固定>

<スターズF、ライトニングF、エンゲージ！>

<皆、気張って行こかつ！>

『はいっ！』

市内中心部にある公園

確かにロストログアはありますが…。

ポヨヨーン、ポヨヨーン、ブヨヨーン！的な感じの擬音が聞こえてき
そんなロストログアが……。

「スライム？ しかもポピュラーな形な上に、数多過ぎないか、これ？」

<危険を感じると複数に分裂してダミー体を増殖する、だが本体は一つです>

< 本体を封印すると、ダミー体は消滅するぞ >

「放って置けば、ダミー体が増えるからな、空戦チームは広がったダミー体の回収、そっちはお前等が頑張れ」

「素早く考えて、素早く動く！練習通りでいける筈だよ」

『はいっ！』

「……全然攻撃が効かない」

「打撃、斬撃、火炎は効かない、なら雷撃だけど、無傷で捕獲、だから無理だな」

「もう本体見付けて封印するしかないね」

「そうね、でも肝心の本体が分からない以上は無理ね」

「探查結果待ちか」

「ともかく、これ以上広がらない様に固めようぜ」

『おう！』

数分後…

「解析完了です、皆の周囲にはオリジナルはいません、オリジナルはキャラの南西50のポイントです」

『了解!!!!』

「皆、最初に比べて格段に動きが良いね」

「なのはちゃんの教導の成果かな、その他の経験e t c , e t c」

「本体が分かればダミーを一掃するぜ、《蔽霊》！」

ダミーのスライムを打ち抜いて消し去っていく。

「ティアナ、キャラ、本体はどうなってる？」

＜アルケミックチェーンで拘束できましたが、バリアに阻まれて…＞

＜分かった、スバル、エリオ、二人の援護を頼む＞

《了解!!》

「エリオ、アサルト・コンビネーション行くよ！」

「はい、スバルさん！」

「Explosion」

「行くよ、マツハキヤリバー！」

「Road Cartridge」

「ストライクッ」

『ドライブバーツ！！』

カートリッジがそれぞれ一発ずつ排莢され、同時に繰り出された打撃と斬撃がバリアを破壊する。

「バリア破壊！ クロスミラージュ、バレットF」

「Road Cartridge」

「>我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力をく」

「Get set」

「シーリング」

『シュート！』

封印の能力を込められた魔力弾が放たれ、スライムの行動と能力を停止させる。

封印といっても、簡易封印。一時的に行動と能力を停止させるだけだ。

ダミーも着弾と同時に全て消失。後は、完全封印だけだな。

「おしつ、動作停止確認、完全封印処理しよか、シャルル」

「はい」

「あの、すみません、八神隊長、シャルル先生」

『ん？』

「完全封印、私が遣っても良いですか？ 練習しておきたいので」

「うん、いい心掛けです」

「見てるから、遣ってみな」

「はい！」

ボックスとしての技も増え、確実に成長しているようだ。

「うん、封印も万全。これにて出張任務も完了や！」

広域結界が解除された瞬間、師匠と対峙した時の異様な感覚が全身に走る。

嘘だろ、確かに此处の近くに封印はあるが誰かが壊さない限りは壊れないぞ。

雨の復活！……対決！

「誰かが封印を破壊した！？」

「龍騎さん、どうかしましたか？」

近くにいたエリオが声を掛けてくるが、衝撃の余り何も聞こえていない。

「エリオ、キャラを守れ！全員、防御魔法最大展開！」

「どういう事だ、説明しろ！？」

説明してる時間が無い、少しでも強引だがアレをやるきゃねえか。

「<オン・カカカ・ビサンマイエイ・ソワカ！>金剛壁陣！」

金剛石の如くの強度を持つ、防壁結界が皆を包む……これで皆は、ある程度は大丈夫だ。

「出てこいよ、居るのは分かってるぜ！」

「俺の気配に気付いていたか、なかなか出来るな」

木陰から青いタイツに身を包んだ槍騎士が出てくる。

「名は何つうだ、剣士よ？」

「人に名を聞くなり、まず自分からが基本だぞ」

「これは失礼したな、俺はランサーだ」

青いタイトの槍騎士が名乗りを上げる。

「ランサー……アイルランドの光御子か、俺の名は『草薙龍騎』、職業は魔導士兼呪術士だ」

よりもよって最速な奴の封印が解けやがったか。

「俺を知っているのか、珍しいな」

「覚えていないのか、俺の師匠はあんたの元契約者^{マスター}だぜ、過去に何度か会ってるぞ」

「そうか、なら俺の性分も知っているな」

「『強者との死合い』だったか、あんたの望みは」

「そうだ、一つ手合わせ願おうか？」

ランサーは赤い槍……魔槍ゲイ・ボルグを正眼に構える。

「不肖、草薙龍騎お相手つかまつる！」

フツヌシを抜刀しながら、龍騎がその覚悟を態度で表す。

「ランサー参る！」

「雨竜の剣士『草薙龍騎』参る！」

刹那の瞬間、お互いの刃が交差し、決闘が開始された。

「はあっ！」「せいっ！」

ギンツ！

「おらっ！」「ふんっ！」

ガキンツ！

幾度となく互いの刃が交差する、その全てが必殺の、急所狙い！

「中々の腕前でござるなっ！」

「師匠に比べたらまだまだだっ！」

キンツ！

「フツヌシ、急所だけに防御集中、捨て身じゃなきゃ勝てない！」
《無茶は承知の上だ！》

「そりゃそうだなっ！」

ギンツ！

「話をしている余裕があるのかっ！？」

「黙らっしやい！」

ギャンッ！

「（……このままじゃ埒が開かない）^{ソウウ}双雨」

一旦フツヌシを鞘に収め、一気に近付く。

「無防備に突っ込んでくるか！」

ランサーの突きを半身で躲し、フツヌシと鞘の二段抜刀術で反撃する。

しかし紙一重で躲され、タイツを掠めた程度で終わる。

「初見で躲すか、流石はランサーだな」

「てめえもな、あの技は見事だ」

「そろそろ決着をつけるか？」

「最高の一撃で屠る！」

「こちらも奥義で相對したいが、まだ未修得でな、行くぜ！」

「その心臓、貰い受ける　　！『刺し穿つ【ゲイ・】』……」

「雨竜秘剣の壱」

「……『死の槍【ボルグ】』！」「『九頭雨』！」

『刺し穿つ死の槍【ゲイ・ボルグ】』、紅き魔槍の持つ因果逆転の呪いにより、真名開放すると「心臓に槍が命中した」という結果を

つくってから「槍を放つ」という原因を作る。つまり必殺必中の一撃を可能とする。

対してこちらは剣術の基本である9つの斬撃「壹いち：唐竹からたけ」「貳に：袈け袈斬さきり」「参さん：右薙みぎなぎ」「肆し：右斬上みぎきりあげ」「伍ご：逆風さかかぜ」「陸ろく：左斬上ひだりきりあげ」「漆しち：左薙ひだりなぎ」「捌はち：逆袈さかげさ」「玖く：刺突つき」を同時に放つ技だが……何分未熟だから多少はズレるのよ。

結果は……技の反動で周囲に土煙が立ち込め、晴れた場所に一人の人影が立っていた。

雨の復活！……対決！（後書き）

大分遅くなりました。

使用した技の一覧です

* 双雨

フツヌシと鞘での二段抜刀術（モデルは双龍閃）

* クズサメ 九頭雨

モデルは九頭龍閃です

龍「ちよつと待てや！！」

どうした主人公？

「なんでる〇うに〇心なんだよ？」

自分ファンなんで、使わせてみたかったのよ、次回もお楽しみに！

「あつ、逃げた！何か落としたな……何々『祝 O H A N A
S I 四 成立』……回避できるかな？」

プロフィール

Name . 草薙龍騎 クサナギリユウキ

年齢：18歳

身長：175cm

体重：75kg

所属：時空管理局遺失物管理部機動六課

階級：一等陸士

使用術式：近代ベル力式

魔力光：銀色

魔力量：AA

魔導士ランク：陸戦A+

所持資格：危険物処理／バイク免許／etc . etc . . .

使用デバイス：フツヌシ、ヘカトン

レアスキル

呪術……呪術と言っても人を呪い殺すようなグロイモノでなく、火の鳥を生成してぶつけたりする等である。

魔力高速運用・瞬間詠唱処理能力……レアスキル認定されていない技能

フツヌシ

AI搭載式日本刀型アームドデバイス
武器としての基本形状：日本刀

待機状態：球状の宝石

1st：日本刀

2ed：日本刀+小太刀

3rd：斬馬刀

final：????

カートリッジシステムは開発当時はまだ安全性が保証されていなかったため。武器としての特性は一級品だが、デバイスとしては最低限の機能しか搭載していない。

その代わり、複雑な形状変化は搭載していないため、頑強さは並のアームドデバイスを凌ぐ。武器としての威力も保証済み。

AIの声イメージ：女性

ヘカトン

非人格型籠手型アームドデバイス
形状：大型の左腕用ガントレット

待機状態：フツヌシの待機モードに収納される形になり、Set Up時に瞬間装着される

機能：6連装式のリボルバー形状のベルカ式カートリッジシステムによる魔力増強、頑丈さを活かしての防御、ナックルとしての攻撃、フツヌシとのシンクロ機能

龍騎自身によって、特定の呪術のための表面加工が施されている。

戦闘スタイル：剣術を主とした近接戦闘、魔法、呪術は中距離等でのサポートが主な使い方

資質的にはまとまっているが、魔法、呪術は幼少時に基礎を齧っただけに過ぎないのだが、『一を聞いて五を理解する』秀才型なためその成長速度は極めて高い。

★クラスカード

剣と心意気の師『蘊・奥』が所持していた英霊と呼ばれる者の力が宿った危険なカードで、全部で七枚ある

インクルード
限定召喚

クラスカードに込められた英霊の力の一部をデバイスを媒体にし引き出す。大抵は英霊の武器を召喚する、一度使用すると、数時間は使えなくなる

インストール
夢幻召喚

クラスカードの真の力。英霊の力を自身の体を媒体にし具現化させることで、その能力をフルに発揮する

『O H A N A S I』と契約（前書き）

短いです、勢い任せで書いたので粗いです。

『O H A N A S I』と契約

「誠にすみませんでした、これからは仲間を頼り、単独行動を自重致します！」

土下座で謝罪を述べる俺……何でこんな風に始まるかというと、昨日の単独戦闘によるO H A N A S Iが終わったところなのだ……マジでなのはさんが魔王だったぜ！！

「これからどうする、フェイトちゃん？」

「私達は一日休みだからね」

「そやね、どうしよか？」

なのはさん達三人娘は有休がかなり貯まってるらしく、人事部から無理矢理休暇をとらされた。

自分？出張任務前に有休申請しといたから無問題！
モーマンタイ

「自分は寝ますので、悪しからず」

速攻で睡眠決定、起きたら何するかな。

「駄目だよ、少し付き合って貰うから」

「寝かせて下さい！」

「却下！これだけ美女が居るんだから、喜ばなさい！」

女を舐めたらイケないと実感、半日連れ回されました。
さっさと契約して、小次郎を召喚しよ。

「『誰でも出来る妖刀との契約の仕方』……………手に入れた妖刀と対話して同調、血を一滴垂らして、その色が光れば完了……………こんだけかよ」

俺が手に入れた贄殿遮那と対話するが、『刀匠』『贄殿遮那』『鎧武者 天目一個』の3つの意識が混在していた為、難航し何とか契約までこぎつける。

「えつと、KUSANAGI RYUKIつと、血を一滴垂らしてつと」

ポタツ……………ピカーン！

紅色の光が一瞬光り、カードの裏に五亡星が浮かぶ。

「契約完了、後少しで帰還時間か、長い様で短い休日だったな」

＊獲得

宝具「贄殿遮那」、契約完了

ホテル・アグスタ

「ホテル・アグスタの警護任務？ホテル・アグスタって確か年に一度の割合で、合法ロストログアのオークション会場になる場所ですよね」

「そうだよ、だから警護任務」

「ガジェットは、ロストログアを感知して行動するから、ロストログアが集まるこのオークションを襲撃してこないとも限らないからね」

「合法ロストログアのオークションか、裏でヤバい取引でもされてたりして」

「それは無い……とは言いきれませんがね」

「ともかく、隊長陣は内部の警護に回るから、皆は副隊長の指示に従ってな」

『了解！』

にしても何か嫌な予感がする、ハズレだと良いんだがな。

機動六課：普通では考えられない戦力を保持する試験部隊、部隊長を含めて隊長陣はオーバースランク、副隊長でもニアスランク。

他の隊員も前線から管制官まで未来のエリート達。

フェイトさんの秘蔵っ子である年でBランクのエリオ、レアな召喚士のキャロ。

希少技能を二つ保有し、最近では強力な使い魔を得た龍騎。

危なかつしいけど潜在能力と可能性の塊のスバル。

「凡人は「あたしだけか？」龍騎!？」

「スバルから聞いた、最近悩み事があるらしいからな、鎌を掛けたら一発だな」

「トップエリートのアンタに何が分かるのよ!？」

「分からんさ、人の気持ちなんぞ、でもな、信頼出来る仲間が居るんだから頼れよ」

《来ました!ガジェットドローン陸戦?型、機影30、35……》

《陸戦?型、機影2、3、4!》

「……………何か腹たってきた、憂さ晴らした!」

《前線各員へ、状況は広域防御戦です、ロングアーチ1の総合管制と合わせて、私、シャマルが現場指揮を行います!》

「スターズ03、了解!」

「スターズ04、了解!」

「ライトニング03、04了解！」
「ライトニング05、了解ッス！」

ティアナはクロスミラーージュのアンカー機能を使ってバルコニーへ、
龍騎は瞬動モドキで正面入口に向かう。

…正面入口…

「副隊長達とザフィーラ凄いな、次々にガジェット落とすとわ」

「速度も展開力も段違いですね」

「これで能力リミッター付きなんですよね」

「シグナム副隊長位ならリミッター付きでも連携すれば勝てるかどうかだな」

シャルさんに頼んで回してもらったモニターを見ながら、三者三様の感想を述べる。

「ケリユケイオンに反応、誰かが召喚魔法を使っています」

『クラールヴィントにも反応、でも、この反応！？』

モニタにも出てるがほぼこの近辺全域に召喚魔法の反応が出てるのは、腕の良い召喚魔導士だな。

「！！？遠隔召喚、来ます！」

4つの召喚魔法陣が現れ、其処からデカブツ―陸戦？型1機、見慣れた？型が10機。

「召喚ってこんな事も可能できるの？」

「優れた召喚魔導士は、転送のエキスパートでもあるんです！」

キヤロ、解説ご苦労、ある程度は訓練校で習うぞ、スバル。

「ともかく迎撃するわよ！」

『おうつ！』

「？」

何か今日のティアナって好戦的だよな、相手が召喚魔導士なら慎重に様子見するのがセオリーだか。

*ティアナ・ランスターSIDE

召喚され展開した？型に魔力弾を放つけどダミーみたいに当たらず、回避される、当たってもAMFが強化されてる性が全然効果が無い。

「まともに戦果を上げてるのは、龍騎だけか」

「馬鹿ティアナ！」

後ろから飛んできた攻撃を龍騎がシールドで弾く。

「周囲に気を配れ！」

「ごめん！」

防衛ライン、もう少し持ちこたえてね。ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから！

シヤマル先生の通信が届く。

もう少しだけがんばれば、こっちの情勢も変わる。
作戦終了まであと少しだな。

「っ……守つてばつかじゃ行き詰ります！　ちゃんと全機落とします！」

「ちよつ、ティアナ大丈夫かよ！？　ここは攻めるよりも守りを固めるべきだ、今日は防衛戦だぞ！」

「大丈夫っ！　毎日朝晩練習してきてんだから……！　それにあたも前、キャロに言つてたわよね。『自分の力を信じられないなら、他人を護ることはできない』って！」

「そりや言つたけど………今とは状況が違う！」

「うつさい！　ライトニングはセンターに戻る！　あたしとスバルのツートップで行く！」

そう言い残してティアは走っていく。
スバルを前に出し、その隙を突いてティアのマルチショットでまとめて撃破する。

ティアがやるうとしているフォーメーションは理に適っている。

「こついつ時の嫌な予感って当たるんだよな、エリオ、此処任せた！」

エリオに場を任せる前にある程度落としておいたから後方はある程度は大丈夫な筈だ。

ティアナ、無茶するなよ！

「証明するんだ……！」

風に乗ってティアナの弦きが聞こえてくる。

ティアナの足元には排出された大量のカートリッジがって、幾らなんでも多過ぎる！ティアナの奴、無茶し過ぎだ！

「ティアナ、やめ」

「クロスファイアアアアシューーーーーッ！！！」

俺の叫びをかき消すように魔力弾が放たれる。

スバルに気を取られていたガジェットたちは、次々に爆散していく。息つく間もなく、ティアは魔力弾を放ち続ける。

しかし、次第に精度が落ちていく魔法弾。そして……一発がガジェットをそれる。その魔法弾の向かう先にいたのは……。

「う、うわぁっ！」

ウイング・ロードを滑降中のスバル。

「孔破！」

ギリギリセーフ！加速魔法で加速してスバルに迫る弾丸を殴り飛ばした。

……左手が痛い、けど一言言いたい！

「馬鹿野郎！味方を撃つてどうすんだ！」

「そ、それは……………」

「あの、龍騎、今のもその、コンビネーションの1つで……………」

「命を失う危険性もあるコンビネーションか？ならば今のは双方のミスだ！後は俺とヴィータ隊長がやる、お前らは即座に後退。後方支援している」

「お前らどうした？」

「後で報告書を提出します、今は防衛を優先しましょう」

丁度戻ってきたヴィータ隊長と合流する。

その後、前線のシグナム副隊長とザフィーラ、そして後方で援護していたライトニングフォワード2人にの力で、ガジエツト殲滅には成功した、俺はある程度の事情を話して大事を見て下がった。

味方の被害は俺の左腕、しかし軽傷。

スバルとティアナは裏手で見張り。

ティアナが何か話しかけてきたが全部無視、一寸は反省しろ。

龍騎は根に持たないが、頑固です。

……数日経過……

ホテル・アグスタの任務後、何か夜遅くまで練習してるし、全然反省してる気はするが、無茶ぶりに拍車が掛った気がする、仲間にも

相談しない、きっちり話するかな？

こういうタイプは過去に何かあるな、スバルに聞いてみるか。

スバルに聞いたら、兄が任務中に殉死……それを心無い上司が非難、しかもたった一人の肉親を亡くした少女の前で直球に『任務に失敗する役立たずは云々』とか……しかしこれを同僚が聞いて上層部に注進、こいつは解雇された……ティアナの闇はこの糞上司か、姐さんに相談するか。

幕間・・・・・・・・贈り物

「なんちゅうモノを送り付けてくるんだよ、謎ジイ」

謎ジイから送り付けられた箱の中身を確認すると、呆れ声で独白する。

「龍騎さん、何が送られてきたんですか？」

キヤロにエリオか……俺は無理だが二人にはサイズのOKだなんてこんなモノまで！
夜にでも皆さんに御披露目しますか……フェイトさんが感涙しそうな気がする。

…その夜の出来事…

「あー、テステス、只今マイクのテスト中、テスト中、食堂にお集まりの皆様、ちよいと視線を此方に下さい」

食堂の扉から聞こえてきた変声の方を向くと、犬だかネズミだかよく分からない生き物……ボ　太くんが立っていた。

「何アレ？」とか「何か可愛い！」とか聞こえてくるが俺は主賓では無い。

「僕は前座です、主賓の登場です！」

後ろに連れてきていた三人を前に押し出す。何故三人かって、リン曹長にもお願いしました。

『……………か……………』

『か？』

『可愛い可愛い！！！！！！』

窓をも揺らす大声量、遮音しといて正解、あれ？フェイト隊長はつて……感涙し過ぎて倒れてら。

「あの貴方は誰ですか？」

「自分は知ってる人は知っている可愛いモノの伝道師『ボン太くん』だ！」

悪乗りしてます、因みにエリオ達に着せたのは着ぐるみパジャマ、エリオは電気ネズミ、キャロにはチョコボ、ライン曹長にはペンギンです。

「あ、ありがとう、感激だよ！」

フェイト隊長に抱き付かれました、着ぐるみごしだからコレはOKだよな？

写真会が開催されているエリオ達を置いて、俺逃走、フェイト隊長？何とか引き剥がした。

S i d e O u t

フェイトside

何か最近、エリオ達とのスキンシップが無いよ！ううゝエリオ達分が不足してる（泣）。

「そう言えば……エリオ達が居ない、どうしたんだろ？」

何時も御飯の時には必ず顔を出すのにどうしたんだろ？

「あー、テストス、只今マイクのテスト中、テスト中、食堂にお集まりの皆様、ちよいと視線を此方に下さい」

何だろうと顔を向けると、食堂の扉から聞こえてきた変声の方を向くと、犬だかネズミだかよく分からない生き物が拡声器を持って立っていた。

「何アレ？」

「僕は前座です、主賓の登場です！」

生き物が後ろに控えてた三人を押し出すと……エリオとキャロが着ぐるみパジャマを着て立っていた。

「可愛過ぎる！」

もう幸せ、このまま昇天しても一片の悔い無し！

フェイトSide Out

.

幕間・・・贈り物（後書き）

面白半分で書きました、如何でしょうか？

過ち

「グイータ隊長、正直言うと何か凄くヤバい予感がするんですが、何ででしょうか？」

「龍騎お前もか、あたしもだ」

「今日が模擬戦じゃなかったら、仮病で休みたい位です」

「あたしもだよ、でも仮病は使うなよ？」

「バレたら後が怖いので、使いませんよ」

「ともかく訓練場に向かうぞ」

「了解っす」

「何か狙ってる動きだな」

「分かるのか？」

「本人達は自覚してませんが、視線が僅かに交差しました、其処がアクションポイントですから、知らず知らずに確認したんでしょうね」

「凄いな、」

龍騎は幼少時の経験から、洞察力が半端なく、話術ならチーム内一である。

「無理でしょう、下手にクセ付いてるから、直すとなると時間が掛かります、おつ、クロスファイヤだ」

《クロスファイヤ、シュート！》

「・・・？なんかキレが無くねーか？」

「コントロールは良いみたいだけど？」

「そうですねって、本人！？」

スバルの幻影だと思ったら、本人がなのはさんに特攻していた、滅茶苦茶過ぎだろ。

「あの二人、何を考えてんだよ！？」

「こらスバル！ ダメだよ、そんな危ない機動！」

後方からの射撃をかわしながら、なのはさんの注意が飛ぶ、不安定ながらもウイングロードの上に着地するスバル。

「すみません！ でも、ちゃんと防ぎますから！」

あれ…… そういや、ティアが居ない？

なのはさんに向かって一筋の光線…… レーザーサイトが向かう、その先にティアがいた。

ピルの屋上に立ち、魔方陣を展開して狙いを定めている。

「あんな距離から……あれって中距離射撃なんてもんじゃないぞ！」

「砲撃…ティアナが!？」

「違う、幻影だ！ 本物は……ウイングロードの上！ なのはさんの真上だっ！」

視界を巡らせ、ティアを探すとウイングロードを走り、なのはさんの真上に到達していた、そして、カートリッジを二回ロードし、クロスミラージュの銃口からは魔力刃が生まれる。

スバルが動き止めて、ティアナが近接!？

驚いてる間に、ウイングロードから飛び立ち、ティアは狙いを定めてなのはさんへと落ちていく。

なのはさんは動きを止めたまま……直撃コース！

「一撃必殺っ！ でえええええいつ！」

「レイジングハート……モードリリース」

ティアがなのはさんへと突っ込み、大きな爆発が起こる、吹きすさぶ風が、もうもうと立ち込める粉塵を即座に払う。

「おかしいな……二人とも、どうしちゃったのかな……？」

そこにはシールドではなく、左手でスバルの拳を受け止め、右手でティアの魔力刃を受けていたなのはさんが立っていた。

魔力による威力相殺を行ってないせいか、魔力刃を持つなのはさん

の手からは血が流れ始めていた。
俯いたまま、なのはさんは冷たい声のまま言葉を続けた。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は……ケンカじゃないんだよ」

スバルとティアはその場で固まっている、ティアに関してはなのはさんの重力制御によるものなのか、空中で止まったままだ。

「練習の時だけ言うこと聞いているフリをして、本番でこんな危険な無茶するんなら……練習の意味、ないじゃない」

「ちゃんとさ、練習どおりやろうよ。ねえ、私の言ってる事……私の訓練……そんなに間違ってる？」

ティアは魔力刃を消し、跳躍して距離を開ける、再びカートリッジをロードし、銃口をなのはさんへと向ける。

「あたしはっ！ もう誰も傷付けたくないからっ！ 無くしたくないからっ！」

涙ながらに叫ぶティア、照準を合わせ、魔力を収束させていく。

「だから……っ！ 強くなりたいんですっ！」

「少し……頭、冷やさうか」

叫ぶティアに、なのはさんはゆっくりと指先を向ける、足元には桜色の魔方陣、指先には幾つもの魔力弾、あれはっ！？

「クロスファイア」

「うあああああああああああつ！ファントムブレイ」
「シュート」

ティアが魔法を放つよりも早く、なのはさんは本来ティアが得意とする魔法を放った。

魔力弾は真っ直ぐにティアへと向かい……炸裂した。

「ティアッ！？……バインドッ！？」

直撃したティアに駆け寄ろうとするスバルを、なのはさんは許さなかった。

なのはさんのクロスファイヤーシュートを受けたティアは、もうフラフラで意識が朦朧としているのが遠目にもわかる、さらにスバルに見ているよう命じたなのはさんは、二撃目の準備に入る。

アレ以上は無理だ！

「畜生ッが！」

咄嗟にバリアジャケットを纏って、ティアの前に加速魔法で飛び出す。

そして、斬撃………一閃！……出来れば良かったが、代わりになのはさんの攻撃喰らってノックアウト！

俺って格好悪い（泣）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1956k/>

魔法少女リリカルなのはStrikers 風の吹く壺に

2011年10月6日19時02分発行